昭和48年6月10日発行通巻116号(毎日曜日発行) 昭和48年1月12日国鉄首都特別扱承認雑誌第1245号

朝日=ラルース

6/10
220円
115

# 週刊 世界動物百科



朝日新聞社

## 目　次

**世界動物百科　第115号**



監修　浦本昌紀（山階鳥類研究所所員）
翻訳　大沢寛三（本誌編集部）

## 読者のみなさまへ

**こんな動物が登場します**　この〝百科〟は動物を機械的に50音順に並べたものではありません。系統だった分類に従い，次のような順序と冊数でお届けしております。概説（2），哺乳類（62），鳥類（64），爬虫・両生類（16），魚類（16），軟体動物・昆虫類・甲殻類・腔腸動物などの無脊椎動物（32）。現在，哺乳類が終了し，65号から鳥類が続々と登場しています。《1～128号の内容は表3参照》

**総目次と総索引がつきます**　見て，読んで，楽しむ〝百科〟としてだけでなく，引いて調べる〝事典〟としての機能を完全にするため，16冊ごとに総目次，64冊ごとに収録類別の索引をつけ，また最終の192号には詳細な総索引をつけます。

**「私たちの仲間」のページ**　第一線動物学者の執筆による解説と注があります。また〝動物週刊誌〟として，ニュースや話題，楽しい読物，ペット相談などを掲載しています。

**ファイルで保存してください**　全192冊を発行順に16冊ずつ，美しいファイル（定価600円）に，とじこんでください。堅牢豪華な〝動物百科事典〟全12巻がそろいます。なお，バックナンバーのお求めは，表3「本誌の購読について」をごらんください。

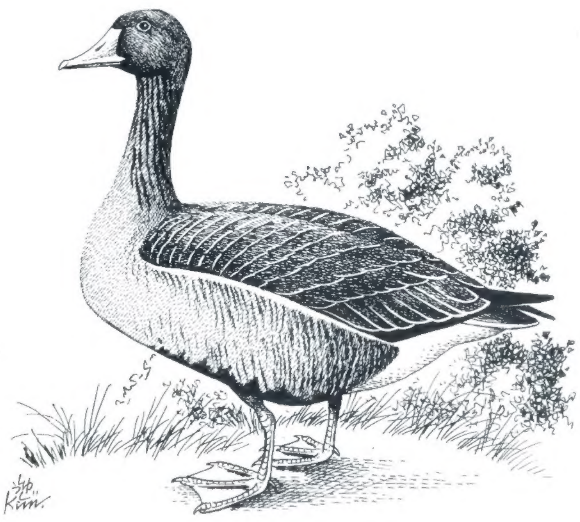
**凡　例**

□本文中〔　〕を使ったものは，日本版のために付加した説明である。
□くわしい注釈が必要な語には，〔注1〕と番号を入れ，「私たちの仲間」第27ページに，同番号で記載した。なお末尾にページ数（上両端）を付記した。
□動物の種名は，原則として和名（一般に通用している外来語を含む），学名（イタリック）の順で表記した。和名の多い場合，併記しているものもあるが，専門家と協議し，編集部で決定した。和名のないものは，英語名または仏語名をカナ書きで入れ，原語（ローマン）を付記した。
□人名，地名は，本人または現地読みを原則としたが慣用の固定しているものは，それに従った。

**◆日本迷鳥録◆ 48**

## ハイイロガン

*Anser anser*



文　内田康夫
え　木村しゅうじ

動物行動学の創始者であるマックス・プランク研究所のコンラット・ローレンツ博士は，有名な著書『ソロモンの指輪』のなかで，博士が手塩にかけて育てたハイイロガンの子〝マルティナ〟について，実に感動的に述べている。彼女が卵からかえって，はじめて博士と挨拶をかわし，博士とのあいだに切っても切れない深い心理的な結びつきができあがっていくくだりはとくにすばらしく，読む者をして胸のつまるような感動にひき入れる。この過程は，博士によって〝刷りこみ〟と名づけられた現象で，一定の動物群の行動を規定している重要な要因のひとつであり，動物行動学の基本概念のひとつともされている。

ハイイロガンは全長75～90センチの大型のガンで，ユーラシア大陸中・北部で繁殖し，冬は南方へ渡る。ヨーロッパでは普通種だが，従来，日本では埼玉，千葉，石垣島，西表島などで記録されたが，1972年3月には，鳥学同好会ほかの人びとにより，石垣島などで数羽が記録された。■



## コリー犬ボビーの物語 上

藤原英司
え　清水　勝

# 荒野を越えて 大陸横断4800キロ

私たちの仲間
115号…6月10日

1924年2月15日、アメリカのオレゴン州にある小さな田舎町シルバートンで、思わず耳を疑いたくなるような噂が、人びとのあいだに伝わった。

その町のブレイザーという男が飼っていたイヌのボビーが4800キロ以上の旅をして、主人のもとへ帰ってきたというのである。イヌやネコが飼主のところへ帰る話はむかしからよくあるが、とにかくそんな途方もない長距離を帰ってきた話など、人びとは一度も聞いたことがなかった。そのため町の人びとは、ボビーをめぐって、にぎやかな話題を繰りひろげた。

この騒ぎを聞きつけたオレゴン州の動物愛護協会会長E・ホウファは、さっそくボビーに会いに、シルバートンへ出かけた。そして噂がうそでないことを知ると、すぐに調査に乗りだした。すると驚いたことに、ボビーを見たとか、世話をしたとかいった報告が、続々とホウファのもとに集まってきた。ホウファはそれらの報告を詳細に検討した。そして正確を期すために、少しでも疑わしいところがある報告はすべて除き、次々と調査を進めていった。その結果、ボビーがたどった長い旅の道筋が、しだいに明らかになりはじめた。

ボビーについて調べた人はホウファだけではない。作家であり、また『オールバニー・デモクラット・ヘラルド』紙の記者だったチャールス・アレキサンダーは、ボビーの話を知って、実際にボビーを見たという人びとに会い、個々の話を確かめた。またビンセント・ガディス夫妻も、後年ボビーの資料を再検討した。

ボビーは、行きずりの人びとに、実によく記憶されていた。これはボビーが人を引きつける力をもっていたことを示すものであるが、ボビーがからだの大きいコリーであったことも、ひと役かっていたとみていいだろう。コリー種のイヌは鼻の長い優雅な気品を備えたイヌで、一般の野良イヌのイメージからはほど遠い。だからボビーが単独で歩いているのを見た人は、すぐにそれが迷いイヌであることを知り、記憶にとどめたものと思われる。さらにボビーには、人目につく4つの大きな身体的特徴があった。ひとつは尾が短かったことで、尾の短いことを英語ではボブテイルといい、ボビーという名まえは、ここからつけられた。さらにボビーには目の上に傷があり、また歯が3本欠けていた。また4つめの特徴として、尻がからだとくらべてひどく不釣合な感じを与える形をしていたことである。これらの特徴のうち、あとの3つは、いずれもボビーが子イヌ時代に、からだに受けた傷の痕跡だった。

この4つの特徴は、ホウファやアレキサンダーがボビーについて調査した際、報告されたイヌがボビーであるかどうかを決める大きなよりどころとなった。当時、もしもホウファやアレキサンダーが、帰ってきたボビーになんの関心も示さず、また本格的な調査に乗りださなかったとしたら、ボビーの話は、ただのいなか町の噂で終わり、その壮大な旅も、たんなる誇張された物語として忘れ去られてしまったことだろう。つまり、ボビーのすぐれた能力の真実性を裏づけたということで、ホウファやアレキサンダーの功績は、高く評価される値うちがある。

### 買いもどした子イヌ

ボビーは、オレゴン州のシルバートンでレストランを経営していたフランク・ブレイザーのイヌだった。ブレイザーはレストランを経営するようになる前、町の近くの農場に住んでいた。そのころ、かれは5ドルの金をはたいて、生後6週間のボビーを手にいれた。ブレイザーが町に出てレストランを開業したのは、ボビーが2歳半になったときだったから、ボビーは子イヌ時代のほとんどを農場で過ごしたわけである。

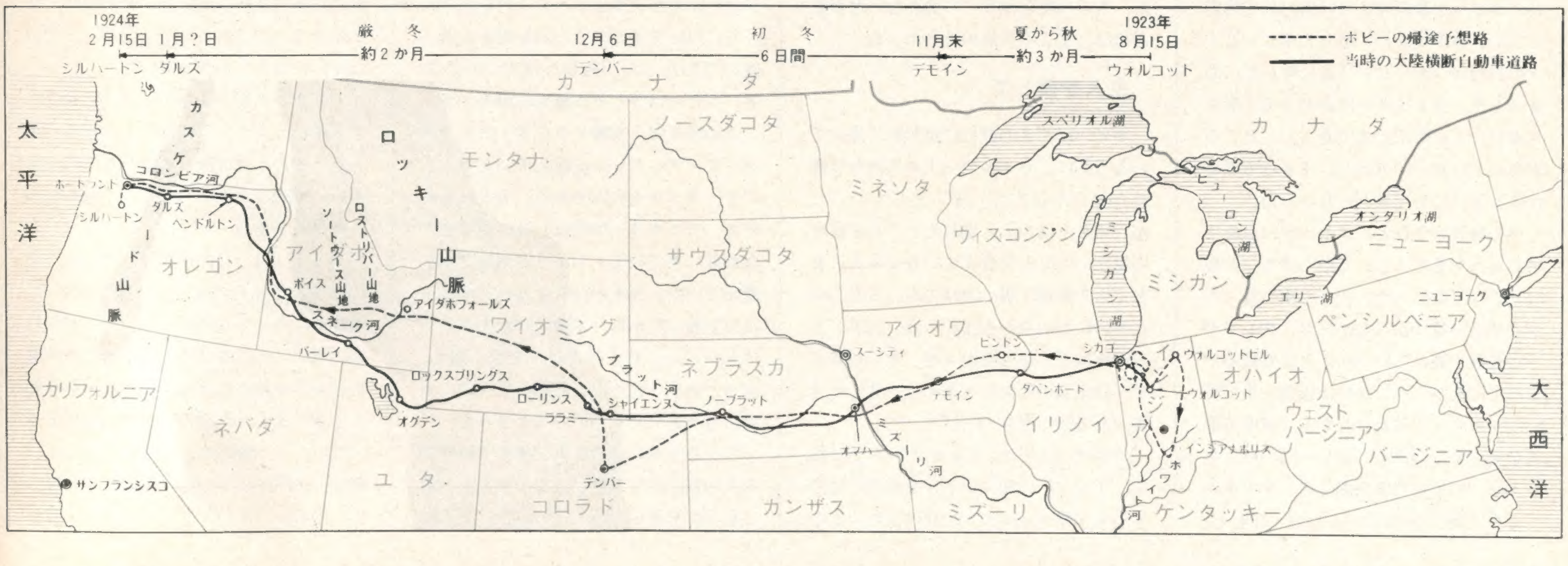
ボビーは、子イヌ時代には、なかなかきかん気の扱いにくいイヌだったらしい。だが主人の命令には忠実で、物覚えも早かった。ボビーは毎日、夕方になると、ブレイザーにかわって、乳牛を納屋へ追いこむ仕事を果たしていた。

ボビーは尾が短かったことのほか、からだに3つの傷の痕跡をとどめていたことを先に述べたが、それらの3つの傷は、すべて、この農場での生活で、からだに受けたものだった。まず、ボビーの右目の上の傷痕であるが、これは生後2か月のころに、ウマのあと足に近づきすぎて蹴とばされ、6，7メートルほどすっとばされたときに受けた傷だという。だがボビーはこのとき、たちどころにむっくり起きあがると、傷にもめげずにそのウマを追いたて、とうとう納屋へ追いこんでしまった。これはボビーの気の強さを示すものとみていいだろう。

またボビーは、尻の片側にちょっとした傷があったが、これは果樹園でトラクターにひかれたときの傷だった。このとき、ボビーは危うく一命を失うところだった。さいわい命拾いはしたものの、尻の片側は結局もとの形にもどらず、ボビーの尻はひどく不釣合な感じをとどめることになった。さらにボビーの前歯が3本欠けていたのは、夢中になってジリスを掘りだそうとしていたときに、木の根をかじって折ったものだった。

やがてブレイザーは農場を売って町にレストランを開くことにした。そのときかれは、ボビーを農場につけて、いっしょに売りはらってしまった。ところがボビーは、新しい主人をどうしても受けいれなかった。そして、いくら叱っても、町のレストランへ逃げだしていった。ブレイザーも、これにはついに根負けして、とうとう再び金を払ってボビーを買いもどしたのだった。

こうして一度捨てられたボビーは、再び主人といっしょに、町のレストランで暮らすことになった。〝栴檀は双葉より芳し〟のたとえのとおり、ボビーのすぐれた資質は、すでにこのとき、はっき



り現われていたとみることができる。

## 未知の世界へ

1923年8月6日，ブレイザー夫妻は，インジアナ州の親類を訪れるために，シルバートンを出発した。日本でいえば，この年は大正12年にあたり，関東大震災（9月1日）が起こった年である。自動車の国アメリカでも，その当時はまだ道が悪く，車もクランクを回してエンジンをかけた時代で，タイヤも今ほどじょうぶではなかった。途中の宿も思うにまかせず，ブレイザー夫妻は車に，テントや鍋の類をぎっしり積みこみ，子どもは知りあいの家へ預け，連れていくペットもボビーだけにした。車の旅とはいえ，オレゴンからインジアナへのおよそ4800キロの旅は，決して楽なものではなかったからである。そしてボビーにとって，それは生まれてはじめて経験する未知の世界への冒険旅行だった。

夫妻とボビーは，長い旅のすえ，ついにインジアナ州のウォルコットへ到着した。夫妻はその町の親類へ1泊したのち，翌朝，今度の旅の最終目的地ブラフトンへ向かう予定だった。ブラフトンは，そこからさらに約160キロ東へいったところにあった。ブレイザーはウォルコットの親類の家に妻をおろすと，すぐ車の修理工場へ向かった。明朝にそなえて，キャブレターを調整する必要があったからである。ボビーは，いつものように車に飛びのって，ブレイザーといっしょに修理工場へ出かけた。

そして修理工場へ着くと，ボビーは車から飛びおりた。ところが，車から飛びおりたはずみに，ボビーは歩道にいたブルテリアにぶつかってしまった。ブレイザーは車を修理工場に乗りいれながら，そのことに気づいた。だが，別に気にしないで，車を工場へいれた。ところが，数分たつと，急にすさまじいイヌのほえ声が起こった。

ブレイザーが修理工場の中からのぞくと，ボビーが数匹のイヌに追われて疾走していく姿が見えた。そしてボビーとイヌの群れは，あっというまに町かどに姿を消した。ブレイザーはあわてて工場から飛びだし，町かどまで走った。ところが町かどへ着いてみると，イヌたちの姿はもうどこにも見あたらなかった。

車の修理がすむと，ブレイザーは車で町じゅうをまわった。しかしボビーの姿はどこにもなかった。やがて夜になったが，やはり見つからなかった。ブレイザーは長旅で疲れていたが，とても眠るどころではなかった。かれは夜通し車で町のなかをゆっくり走りながら，何度も警笛を鳴らしつづけた。ボビーはいつもブレイザーの車の警笛を聞くと，すぐ車のところへ駆けつけたからだった。しかし，その夜は，いくら警笛を鳴らしてみても，ボビーはどこからも姿をみせなかった。

翌朝，ブレイザーは新聞社に頼んで，ボビーを捜す広告を載せてもらった。ボビーを見つけてくれた人にはお金を払うという広告を出したのである。

ブレイザー夫妻は，知らせがくるのを待った。だが，ボビーを見たという人は，なかなか現われなかった。そこで，夫妻は，とにかくブラフトンへいくことにした。そして帰りに，もう一度ウォルコットの親戚の家へ寄ることにした。それまでには，ボビーも見つかっているだろうと思ったのである。ところが，数日してウォルコットへもどってみても，ボビーを見たという人は，ついにひとりも現われなかったことがわかった。

夫妻の悲しみは大きかった。だが，いつまでもウォルコットにとどまっているわけにはいかなかった。そこで夫妻は，重い心を抱いて，オレゴンへ向けて帰途についた。↙



↙ ブレイザー夫妻は，ボビーがオレゴンの家へ帰ってくるなどとは，夢にも考えなかった。インジアナからオレゴン州西部といえば，もうちょっとでアメリカ大陸を横断してしまうほどの距離である。したがって，ボビーを見失った夫妻が，もう二度とボビーに会えないと考えたのは，しごく当然のことだった。

## 主人を捜して

ボビーはイヌの群れに追われて走っているうちに，ウォルコットからかなり離れたところに出てしまったらしい。だが，ボビーは主人と別れたところが修理工場だったことを覚えていたようだ。あちこちで修理工場へ忍びこみ，こそこそと車のにおいをかぎまわった。だが，主人の車はどこにもなかった。そのためボビーは主人のにおいを求めて，まったく誤った方角へ進みつづけた。

やがてボビーはウォルコットではなく，インジアナ州のはるか北東部に位置するウォルコットビルの村に出た。この村ではボビーは金物店の店員をしていたF・D・フュートンの家を訪れている。ボビーはそこに1週間とどまり，体力を回復すると，西へ向かって姿を消した。

だが，ボビーは再び誤った方角をとった。そして数日後にボビーは200キロほど南へ下り，インジアナポリスに近いホワイト河へ姿を現わした。ボビーはホワイト河へはいり，東から西へ流れを泳ぎわたると，西岸にキャンプを張っていた浮浪者の群れに合流した。ボビーはこのとき，浮浪者たちと2日を過ごし，北西へむけて旅立った。ボビーは後日，またこのときの浮浪者と出会うことになるが，ボビーが北西へ出かけたというのは，そのときの浮浪者の証言である。

ボビーが主人とはぐれてから，もうすでに1か月がたっていた。ボビーはその間，まったく方向がわからないまま，休みなく旅を続けていたと思われる。そして飢えと疲れに耐えられなくなると，ボビーはイヌ好きな人を見分けてその家にとどまり，からだを休めたにちがいない。しかし，体力が回復すると，ただちにその家をあとにして町を抜け，草原を横切って，ただひたすら歩きつづけたと思われる。

ボビーは北へ，あるいは東へと進みつづけた。やがてウォーバシュ川を泳ぎわたり，ついでチピカヌー川を東から西へ泳いでわたった。西岸へ泳ぎついたあと，ボビーはひとりの婦人に出会った。

この婦人は，当時インジアナポリスのパーク・アベニューに住んでいたウィリアム・プラット夫人である。夫人はそのとき，チピカヌー川のほとりにある小さな別荘にきていて，ちょうど木陰で本を読んでいた。夫人の話によると，ボビーは川を渡ってから，木陰にいた夫人のそばへいった。夫人はボビーを快く迎え，引きとめようとした。だがボビーは，すぐに道へ走りだしていってしまった。

ところがその日の夕方，ボビーは再び夫人の別荘へもどり，そこで夫人から水と食べ物をもらった。このとき，夫人はイヌがかなり疲労しているのに気づいて，家に呼びいれようとした。しかしボビーは夫人のいうことを聞かず，そのまま駆け去ってしまった。

このころボビーは，あきらかに混乱して，インジアナ州の北西部をぐるぐるめぐっていたようである。というのは，ボビーはそれから5日後に，3たびプラット夫人を訪れているからである。そして3度めのとき，ボビーは夫人のいうことを聞いて別荘にとどまった。しかし，翌朝になるとボビーは再び姿を消した。

このとき，ボビーの内部で，なんらかの変化が起こったようである。むかし，ボビーの祖先が広大な森や草原をさまよっていたころ，その祖先のイヌたちを導いていた特殊な能力が，ボビーの内部で急に目ざめはじめたようだった。ボビーはこのときから，ぐるぐるめぐりをやめて，一路西へ進みだした。そしてボビーは，イリノイ州の北部を横切り，アイオワ州へはいったとみられている。

## なつかしい警笛

アイオワ州ビントンの町で，ビントン・ガス会社の秘書をしていたF・E・パットンは，ある日，奇妙な経験をした。町のなかで車をとめ，警笛を鳴らしたところ，突然，大きなイヌが車にとびこんできたのである。車にはパットンのほかに娘ふたりが乗っていた。

パットンも娘たちもびっくりしたが，イヌのほうもだいぶ興奮しているようだった。そのイヌは激しく身をふるわせながら，車のなかに立ちつくして動かなかったからである。

パットンは，その大きなコリーを，そのまま家へ連れて帰った。家へ着くと，ボビーはパットンのあとをついて家のなかにはいった。そして，再び新しい興奮にとりつかれたように，家のなかをせわしく歩きまわりだした。2階へ駆けあがったり，下へ駆けおりたりしながら，一部屋一部屋，くまなくのぞいてまわった。そのようすは，どうもだれかを捜し

まわっているようだった。しかし，まもなく，そのイヌのからだから，まるで空気が抜けるように，いきいきしたようすが消えていった。

ボビーはからだを震わせながら，バットンとその家族の足もとにうずくまった。その夜，ボビーはバットンの家族から夕食をもらい，出されたマットの上に横になって眠った。

翌朝，バットンはボビーに朝食を与えてから，ボビーの頭に手をおいて，このまま家にずっととどまっているように，やさしくいいきかせた。だがボビーは，感謝の気持を表わすようにバットンの手をなめると，ドアのところへいって，低い鼻声をあげた。そしてドアが開かれると，すぐに外へ歩きだし，そのまま姿を消した。

### デモインにて

11月にボビーは，アイオワ州のデモインに姿を現わした。このときボビー ↙



↙ は，ひどくやせ衰えて，腹をすかせていた。しかしボビーはこのときも，イヌ好きな人のいる家を的確に選んで，身を寄せた。

このときのことを，アイダ・M・ブラム嬢は，ブレイザー夫妻に次のように，手紙で書き送っている。

〝……そのイヌは，わたしたちの家にきたとき，黒く重い皮ひもを首につけていました。イヌはポーチに出て眠っていたわたしの甥を見つけて握手をかわし，そのままそこで横になって眠りました。翌朝，イヌは家族のみんなと握手をかわしてから，朝食をもらって食べ，そのあと観光客が泊まっているキャンプ場の方角へ姿を消しました。わたしたちはみんな，そのイヌがひと目で気にいったのですが，むりに引きとめるようなことはしませんでした。しかしイヌは，1時間ほどでまたもどってきて，わたしたちの家にすみつきました。

そのイヌは，ほとんど毎日，キャンプ場の方角へ出かけていきました。そのため，わたしたちは，そのイヌのことを，きっとキャンプ場で迷子になったのだろうと思っていました。わたしたちはいろいろの名まえでそのイヌを呼んでみました。そして結局，ボブという名が，そのイヌの本名にいちばん近いようだということがわかりました……〟

ブラム嬢の証言によると，ボビーは彼女たちといっしょに暮らしている間に，数日間連続して姿を消したことがあった。そして，次に姿を現わしたときブラム嬢はボビーの首についている皮ひもの首輪が変わったことに気づいた。今までの黒くて重い皮ひもの首輪のかわりに，軽い皮ひもの首輪をつけていたのである。しかもその新しい首輪には，ちぎれたロープがついていた。だれかがボビーをつなぎとめていたことは，それで明らかだった。

11月末の感謝祭の翌日，ボビーは再びブラム嬢の家から姿を消した。そしてとうとうそれっきり，二度とブラム嬢の家へは姿を見せなかった。

〝……そのとき，わたしたちがどんなに残念に思ったかは，お話するまでもないと思います。しかし，わたしたちは，いつもあのイヌが捜している主人にめぐりあえればいいと思いつづけていました〟

ブラム嬢の手紙は，こういうことばで結ばれていた。

### 見えない糸

ボビーはブラム嬢の家で暖かいもてなしを受け，数週間，なんの不自由もない生活を送った。そのまま，その家にとどまったとしても，けっこう幸せだったにちがいない。だが，ボビーが心に抱いていた，主人のもとへもどりたいという願いは，想像を絶するほど激しいものだったようだ。

ボビーはデモインを去る途中で野犬狩りに出会い，危うくつかまりそうになっている。だが，その後，ボビーはまるでなにかにとりつかれたように，かなりのスピードで西へ進みはじめた。そしてこのとき以後，ボビーの足どりから，それまでの迷いが，まったく消え去ったようだった。ボビーはまるで見えない糸にたぐられるように，的確にはるか西のかなたにあるわが家めざして進みはじめたのである。

こうしてボビーは，一気にアイオワ州を横切り，ネブラスカ州を越え，デモインを出てから6日後に，コロラド州のデンバーに姿を現わした。デモインからデンバーまでは，直線ではかっても約1000キロの距離がある。そこを6日で踏破したということは，1日平均170キロほどの距離を進んだことになる。170キロというと，だいたい東京から伊豆半島南端に近い下田ぐらいまでの距離である。おそらくボビーは，たえず小走りに進んだのだろうが，その途中は決して平坦な道ばかりではなかった。おまけにアイオワ州からネブラスカ州にはいるには，ミズーリ河を渡らなくてはならず，またネブラスカ州からコロラド州へいくには，プラット河を渡らなくてはならない。このふたつの河は，ともにミシシッピー河の支流をなす大河で，これらの河をボビーが泳いで渡ったとは考えられない。事実，ボビーはミズーリ河にかかっている橋を渡ろうとした。そして，そこの検問所で監視員につかまった。しかし，ボビーは監視員のすきをみて逃げ，橋の上から河におどりこんだ。あたりはすでに暗く，初冬の夜の河は，さぞボビーの骨身にこたえたにちがいない。河にとびこんだボビーは，おそらく近くの岸に泳ぎつき，夜陰にまぎれて検問所を突破し，そのまま橋を渡ったと思われる。

ボビーがプラット河をどのあたりで渡ったかはわからない。しかし，ボビーが進んだ速度からみて，やはりどこかの橋を渡ったにちがいない。そうでなければ，1日170キロというスピードは理解できない。それにしても，ボビーが途中でえさをあさったり，眠ったりしたことを考えると，6日間に1000キロという速度はたいへんなもので，アレキサンダーはその間のボビーの進み方を〝錯乱状態の気違いじみた進み方〟と表現している。



数少ないボビーの写真　記念はがきに使用された

実際ボビーは，へとへとになってデンバーへたどりついた。デンバーのゲイロード・ストリートに住んでいたカリ・アビー嬢は，ボビーと出会ったときのことを次のように書いている。

〝そのイヌは，わたしたちが自動車の修理工場へいったときに，そこでわたしたちの車に走りよってきました。イヌはわたしたちに会えたことを喜んでいるようでした。とても行儀のいいイヌでしたが，ひどく疲れているように見えました。実際疲労困憊しているといった感じでした。イヌのからだはほこりまみれでしたし，毛皮にはいがかくっついていました。わたしたちはそのイヌがだいぶ長い間歩きまわっていたのではないだろうかと話しあいました〟

ボビーはアビー嬢の家につくと，夕食をもらって食べた。そして何日間かアビー嬢の家に滞在した。地下室に寝床をつくってもらい，毎晩ボビーはそこで眠ったのだった。

アビー嬢の2通めの手紙によると，彼女がボビーの姿を見たのは，12月6日のことだったという。アビー嬢の家では，ちょうど9月に，14歳だったコリーを老衰でなくしていた。だから家族の人たちは，ボビーがそのまま自分たちのところに居ついてくれるといいと思った。だが，ボビーは疲労をいやして健康を回復すると，再び，せきたてられるようにアビー嬢の家をあとにした。あくる朝，家の人たちが起きてみると，ボビーは朝食も待たずに姿を消していた。

ボビーがデンバーでゆっくり休養することができたのは，実に幸運なことだったといわねばならない。というのは，ボビーの行く手には今，それまでの旅とは比較にならない危険と困難が横たわっていたからである。デンバーは標高1600メートルに位置する高原の町で，ここから西には，険しいロッキーの山並みがせり上がっている。そしてその山々は今，真冬のきびしい寒さに凍りつき，谷間はすでに深い雪に閉ざされていた。■

（世界野生生物基金日本委員会委員）

# アマゾン動物記 27

伊沢紘生

# 濃い関係

## ≪3種類のサル≫

ブトマヨ河やカケタ河流域で調査に適した場所を捜しまわっていたとき，あちこちの森でいろいろな種類のサルの群れに出合った。そしてわたしは，違った種類のサルどうしが混群をつくって大木上で仲よく採食していたり，いっしょに移動したりしていたのをしばしば観察し，両者の関係がどうなっているかに大きな興味を覚えた。なかでもリスザルと，同じオマキザル亜科（*Cebinae*）のフサオマキザル（*Cebus apella*）とはいっしょにいることが多かった。またリスザルはやはり同じ亜科の，そしてフサオマキザルとは同じ属であるシロガオオマキザル（*Cebus albifrons*）と混群をつくっていることもあった。

多くの場合は，リスザルの大きな群れのなかに2頭か3頭のフサオマキザルやシロガオオマキザルがいて，その数頭のオマキザルはリスザルの群れのメンバーの一員であるようなふるまいをしていた。ベネージャ川右岸に設定した調査地には，つごうがいいことにリスザルとフサオマキザルとシロガオオマキザルの3者がいた。

## ≪小さい集り≫

フサオマキザルは調査地域でいつ出合っても，おとなの雄と雌，雄と雌とその子どもたち，おとなの雄や若い雄たちだけ，雌と子どもたちだけといった小さいいろいろな集りをつくって，そのおのおのが，かってに遊動しているようにみえた。ときには雄や雌が1頭だけでも行動していた。それらの小さい集りがたまたま近くにいると「ホィーッ・ホッ・ホッ，ホィーッ・ホッ・ホッ」という美しい鳴きかわしが聞かれはしたが，2キロも3キロも離れたところで知らん顔をしているサルたちもいた。

やつらは大木の幹や葉の茂みに身を隠し，姿をくらましてしまうのが実にじょうずだった。おまけに2，3頭からせいぜい5頭ぐらいまでの小さい集りでいたから，深い森林のなかでその動きをずっとトレースしていくことは至難の技で，小さい集りどうしがどのように接触し，またどのように相互に連絡を保っているのか，それらが一時的な集りであるのか，あるいはそれらが各々独立した群れと呼べるようなものかなどを確かめることはむずかしかった。

しかしそれら全部をあわせたものが，ひとつの群れだということを，わたしは12月15日にやっと突きとめることができた。この日，朝からフサオマキザルが激しく5か所で鳴きかわし，10時過ぎに北西に切った観察路の南側でそれらの小さい集りが18頭余りの一団となって北へ向かって移動し，調査地域を出ていってしまった。そしてそれから数日間はフサオマキザルの小さい集りが，それまで毎日どこかで見られた調査地域から，まったく消えてしまった。

このふたつの事実は，それまで幾度も出合ったフサオマキザルの小さい集りの全部を合わせたものが，ひとつの群れであることをわたしに教えてくれた。群れのメンバーが一団となって行動することが少なく，いつもは一時的に小さいいくつかの集りに分かれて生活していた野生チンパンジーの，一見とらえどころのない群れを3年余り東アフリカのサバンナで追っていなければ，ふたつの事実は，あるいはわたしになにも教えてくれなかったかもしれない。それほどフサオマキザルの群れはチンパンジーの群れによく似ているように思えた。そういえば小さい集りがいっしょになるときの，たがいの興奮したはげしい鳴きかわしも，チンパンジーのそれとそっくりであった。


東アンデスのふもとのララの街で　飼い主の少年によくなついていたシロガオオマキザルのこども

## ≪リスザルとフサオマキザル≫

フサオマキザルが12月15日に調査地域を北に向かって出ていったときも，リスザルの群れといっしょだった。また調査地域で小さい集りに分かれているときも，どれかがリスザルの群れといっしょに行動していた。

フサオマキザルの小さい集りが一団となって移動していくまでの間に，わたしはこんな観察をした。そのとき，リスザルの群れも広くちらばっていて，フサオマキザルと行動をともにしているサルもいた。

そのひとつの集りでは，まず2頭のリスザルが「コッ・コッ」とのどの奥のほうからはじき出すようなきつい警戒音をわたしに向かって発して，1本の枝を渡っていき，つづいて，それとそっくりの声を出して2頭のフサオマキザルが通過，最後に3頭のリスザルが小走りに走りぬけていった。もうひとつの集りでは2頭のフサオマキザルと数頭のリスザルが，わたしの接近に気がついて逃げていったあと，1頭のフサオマキザルと1頭のリスザルがミルペソというヤシの木の葉のつけ根のところに寄りそって身を隠していた。

ボールドウィン博士はフサオマキザルとリスザルがいっしょにいる場合，それはひとつのまとまった群れとして生活しているように思えたと報告しているが，わたしの観察した結果からも，それがたまたま採食樹にいっしょにいるといった関係より，ずっと濃い関係にあり，両者が合わさって，ひとつの群れをつくっているとしか考えられない場合が多かった。

## ≪2種類のオマキザル≫

一方，シロガオオマキザルはフサオマキザルよりずっと群れとしてまとまって行動していることが多かった。それは15頭の群れで，調査地域の北半分とそのより外側を遊動しており，リスザルといっしょにいるのを2回観察したが，そこにはフサオマキザルはいなかった。

わたしはシロガオオマキザルとフサオマキザルが混群をつくっているのを一度も見なかったし，両方の群れがいちばん近づいたときでもその距離は600メートル離れていた。現地の猟師の何人かはこの両者が混群をつくることがあるといったが，どうもその頻度はあまり高くないように思われる。ところが，わたしの出合ったどの猟師も，リスザルとフサオマキザル，あるいはリスザルとシロガオオマキザルはいっしょにいることが多いとはっきりいった。同じ亜科のこの3種のサルのうち，同じ属のフサオマキザルとシロガオオマキザルはたがいに避けあうように生活し，しかも両者ともリスザルとは好んで混群をつくっているということは何を意味しているのだろうか。そのなかでもとくに，リスザルとフサオマキザルの濃い関係の解明は，これからのアマゾンでのサル類の調査を継続していく上での，ひとつの大きな問題点だといえるだろう。

## ≪トウモロコシを食うサル≫

耕作地の近くの森にすむフサオマキザルやシロガオオマキザルはトウモロコシ畑やカカオ畑を荒らしにやってくることがあるだろうとオスマン・ヒル博士は推測している。わたしがアマゾン調査行の準備をしているときにブラジルから帰ってきた友人に会って話したとき，友人は夜行性の動物をつかまえるのに木にトウモロコシをつるしたことがあったが，夕方早めにつるすとよくこのサルに盗まれたといった。しかもこのサルは，たいていの動物園で見かけるポピュラーなサルなのだがどうしてか野生状態での研究報告は見当たらなかった。

よし，こいつをトウモロコシで餌づけして慣らし，その生態を観察してやろう。アマゾンへいく前，わたしはトウモロコシを取りにくるオマキザルの姿を夢に描いていた。結果は，調査の重点をウーリーモンキーに置くことになったわけだが，現地の猟師たちが，オマキザルのことをマイセロ，トウモロコシを食うサルと呼んでいることから，近い将来，こいつの餌づけに成功し，より突っこんだ調査ができるようになるかもしれない。

ところでフサオマキザルとシロガオオマキザルとを区別する場合は，前者をマイセロ・ネグロ，色の黒っぽいトウモロコシ食い，後者をマイセロ・ブランコ，色の白っぽいトウモロコシ食い，というのがふつうだったが，前者をマイセロ，後者をタンケと呼んでいる人たちもいた。ダンケがどういう意味なのかはまだわからない。■

## ハイタカ *Accipiter nisus*

ハイタカ属 *Accipiter* は，世界で約50種がありワシタカ科のなかでは大きなグループである。たがいに外形がよく似た小型ないし中型のタカ類である。このグループのユーラシア大陸での代表種が，この小型のハイタカと後出する中型のオオタカであるが，日本にはこのほかにさらに小さいツミ（後出）がいる。

この属の鳥はワシタカ類のなかではつばさは短いほうで，その先端はまるい。尾は比較的長く，あしも長い。かれらは森林のなかを巧みに飛んで他の鳥を捕えて食べることを主としている。雌雄の大きさの差が著しいこともこの属の鳥に共通の特徴で，なかには雌の体重が雄の２倍もある種さえある。

ハイタカ（ワシタカ科ハイタカ属）は，長くすらりとのびたからだ，ワシタカ類にしては小さめの頭部，鉤形の鋭いくちばし，長いあし，先端に大きく曲がったつめがついた細長いゆびなどをもった，みるからに精悍そうな美しいタカである。

雄は全長約31センチ，体重は120～180グラム，雌は全長約38センチ，体重は210～350グラム。羽色（うしょく）は，雄は背面が暗灰青色，ほおは赤みがかっていて，腹面は白地に茶色の横縞があり，尾には幅の広い暗色の帯が５，６本ある。雌は背面が暗褐色で，腹面の横縞は雄より暗色である。日本では雄をコノリ，雌をハイタカと呼びわけていた。

ハイタカはヨーロッパの北の森林限界までの全域と，小アジア，中央アジアから日本にいたるまでのアジア北部の大部分に分布している。部分渡り鳥で，ヨーロッパ北部のものはアフリカ北部に渡って越冬し，アジア北部のものはインド，中国などで越冬する。日本，フランスのハイタカはともに留鳥（りゅうちょう）である。

この鳥は本来は森林性の猛禽であるが，樹木のあるところならどんなところにもすむ。人間をあまり恐れず，秋や冬には村落や町のすぐ近くにまであらわれてすみつく。ときには大都会のなかの公園にまで現われて，獲物が豊富だと定期的に通ってくることもある。

ハイタカは，林の周辺や平野にぽつんとある茂みに沿って，うねうねと曲線を描きながら飛ぶ姿がよく見られる。森の上空や，草木のはえていない開けたところを飛ぶときには，何回か続けてすばやく羽ばたくのと，つばさをぴんとのばしてまったく動かさずに滑翔するのとを交互に繰り返して，まっすぐに進んでいく。もっと高空を帆翔することもある。しかし，狩りをするのは主として森のなかで，



ハイタカ　ワシタカ科ハイタカ属。
樹林をすばやく自在に飛んで小鳥を狩る。
小型ながら精悍な森の狩人。
羽色もごらんのようにたいへん美しい。
日本では平地や低山の森林に少数が生息する

PH. BILLE





茂みにとまっている小鳥にねらいをつけると，ちょっと高くのぼってから獲物の上に不意に襲いかかる。

獲物を追うときは，ハイタカはかなり大胆に人間のすぐそばまで迫ってくることがある。家のなかや，走っている汽車のなかで捕えられた例さえいくつかある。かごのなかの飼い鳥を捕えようとして，人間の叫びも気にせず，少々のけがもかまわず窓ガラスを破るようなこともある。自分よりもはるかに大きな獲物に襲いかかることもあり，ドイツの鳥学者ナウマン（Naumann）は，アオサギを襲うのを目撃した例を報告している。

小鳥たちは，例外なくハイタカを極度に恐れており，その姿が見えるとパニック状態になりながら深い茂みのなかにもぐりこもうとする。しかしかれらも，ときには群れをつくって鋭く叫びながらハイタカに反撃し，追いはらってしまうこともある。

ウッテンドルファー（Uttendoerfer）博士が，864か所のハイタカの巣を調べた結果によると，この鳥はとくにスズメからツグミぐらいの大きさのスズメ目の小鳥たちを捕食している。えさの内訳を見ると，哺乳類（もっとも多いのはネズミ類，ほかにウサギ類とリス類）が1386匹，これに対して鳥類は実に126種5万8077羽であった。なかでも，スズメ，ツグミ類，アトリ類，ヒバリ，ホオジロ類がいちばん多かったという。

ひなに獲物の肉をむしって与えるハイタカの雌
ハイタカをはじめワシタカ類が育雛するときは
雄と雌は交互に狩りにでかけるが
狩りの獲物はすべて雌親がひなに分け与える。
ひなは孵化後4，5週間で飛びはじめる（上）
PH. H. M. BARNFATHER

雌は雄よりも大きくて力が強いので，カケスなどのさらに大型の獲物でも襲って食べる。ふつうの成鳥のハイタカが，飼育下で食べる量は1日に約55グラムで，スズメ目の小鳥なら1～3羽である。かれらは，獲物がとれないときはまったく何も食べないで耐えることもあるが，豊富なときには200グラムぐらいまで食べることもある。ときにはコウモリ類，昆虫（こんちゅう）類も捕食する。

ハイタカは獲物を捕えると，森のなかの人目につかない場所まで運んで食べるが，その場所はほとんど一定しているので，そこには獲物となった鳥の羽毛（うもう），あし，くちばしなどがたくさん散乱している。

繁殖期以外は，この鳥はふつう単独で暮らしているが，ときには1年を通じてつがいでいることもある。繁殖期には多少鳴くが，鳴くことの少ない鳥である。3月中旬ころからディスプレーの儀式が始まり，雄と雌は，高空を追いつ追われつしながら優美に飛びまわる。ディスプレーは5月初旬まで続く。

同一のつがいが造巣する場所は一定しているが，巣は毎シーズンつくり直す。巣は，針葉樹の幹の地上4～12メートルほどの葉が密生しあっているところにつくられる。巣づくりは主として雌がする。巣の形は巣材によって多少違うが，ふつうはマツ，モミ，シラカバ類のかわいた小枝をごく大ざっぱに積みかさね，その上にコケ類や木の葉，ときには土を重ねることがある。中央の産座には小枝，草木の細根，動物の毛，鳥の羽毛などが敷いてある。

産卵は5月中旬から6月初旬にかけてのころで，1腹の卵数は3～6個。卵は表面がなめらかで円形をしていて，色は緑がかった白い地色に暗色の斑点（はんてん）がある。抱卵（ほうらん）は雌だけでやり，抱卵期間は39～42日間。この期間，雄が雌に給餌（きゅうじ）する。育雛（いくすう）中も，おもに雄がえさを運び，雌がそれをひなに分け与える。

ハイタカは，大型のハヤブサ，オオタカなどの犠牲になることもある。人間は，ハイタカが小鳥を狩（か）ることから敵視し，迫害してきたが，実際にはこの鳥は，スズメ目の小鳥，とくにスズメがふえすぎるのを抑制する働きをしているのである。

## オオタカ *Accipiter gentilis*

オオタカ（ハイタカ属）は，ハイタカよりもかなり大きく，全長は雄で約50センチ，雌で約61センチ，体重は雄が570～1110グラム，雌が820～2050グラム（平均体重は雄865グラム，雌1414グラム）である。羽色は背面が褐色で目の上に白い眉線（びせん）がある。腹面は白色で褐色の横縞がたくさんある。しかし，大きさと羽色は地方によってかなり異なっていて，日本のものはいくらか小さい。

オオタカの分布域は，ヨーロッパ，アジア中央部と北部，北アメリカであるが，分布密度は地方によってかなり相違があるようだ。イギリスでは絶滅したと考えられ，フェロー群島（デンマーク領）にはまったくいない。フランスでも際限なしに狩りとられて，たいへん少なくなってしまった。日本での密度はよくわかっていない。

主として留鳥であるが，ときには繁殖場所から100キロ以上も離れた南方へ移動することもある。北方にいるもの（とくにその若鳥）は盛んに移動するようである。

オオタカは森林性の猛禽で，びっしりと木が密生した深い森に好んですむが，平野や標高1500メートルぐらいまでの山岳地帯にもいる。日本での生息地はよくわかっていない。

オオタカは，繁殖期以外は単独で暮らして



ハイタカの英名はスパローホーク(Sparrow hawk)。
食性を研究した鳥学者の報告によれば
獲物はスズメ目の小鳥が中心で
なかでもスズメがいちばん多い。
1日に1～3羽を捕食する。（左下）
PH. AARONS

オナガオオタカ *Urotriorchis macrourus*。
ワシタカ科オナガオオタカ属。
アフリカ大陸特産のハイタカ類の1種。
障害物を巧みに避けながら高速で飛行し
小鳥の不意を突いて鋭いつめで捕える。
PH. OKAPIA







いる。性質はたいへんたけだけしく、人間には極度の警戒心をもつ。飛行ぶりはすばらしく速く、突然上空から羽ばたきながら獲物の上に襲いかかり、つめですばやくさらいとって消える。ヨーロッパにすむ猛禽類のうちでは、もっとも敏捷な鳥といえるだろう。

空中では豪快で機敏な飛行を見せるこの鳥も、地上での動きはまことにぎこちなく、重たげに跳び、自由に歩くことはできない。夜は木の幹に近い低い枝にとまって眠る。

昼間はたいへん活動的で、昼下りのいちばん暑いさなかでも活動をやめないで獲物を狩りつづける。オオタカがねらう獲物は、中型の鳥類が中心で、とくにカケス、ハト、ヤマウズラなどが多い。ときにはさらに大きな鳥類である夜行性猛禽類（フクロウ、ミミズクなど）、昼行性猛禽類、ニワトリ、カモ類、サギ類、ライチョウ類を襲って食べることもある。また哺乳類、とりわけリス、ネズミなどの齧歯（げっし）類やウサギも捕食する。オオタカは、これらの動物が茂みや巣穴に隠れようとする寸前に、背後から襲って強力で鋭いつめで引きずりだしてしまう。

## 必殺の狩人

オオタカはふつう，ねらいを定めた獲物の上に高く舞いあがってから突っこんでいくか，あるいは待ち伏せをする。待ち伏せのときは，ほとんど身動きせず，フクロウ類のようにくびを両肩にうずめて，しんぼう強くじっと待ちつづける。獲物に油断ができたとき，すかさず襲いかかり，ねらった獲物はほとんど逃がすことがないまさに必殺の攻撃をしかける。

繁殖期は３月に始まる。このころになると，雄は森の上空でときどき帆翔しながら輪を描いて飛んだり，つばさを強く羽ばたいてほとんど垂直にのぼっていったりする。雌もしばしば雄のあとを追って飛ぶ。ディスプレー飛行が終わると，雌雄協力して巣づくりにかかる。巣は森のなかの背の高い木を選んで，幹に近い太い枝の上につくる。造巣は雄が骨組みをつくりあげ，雌が内側の産座などを仕上げる。

巣は何シーズンもつづけて使われることがあり，そうした巣は直径も厚さも１メートルに達するものもある。巣は，土台をかわいた枝でつくり，直径30センチ，深さ15センチほどの産座は小枝を敷いてつくる。小枝はシーズンごとにとり替えられるようだ。巣が完成するのは４月中旬ころである。つがいはあまり遠くないところに3，4個の予備巣をもっていて，交互に使うこともある。

産卵は４月中旬から５月初旬で，１腹の卵数は３，４個。卵は青緑がかった白で無斑である。抱卵するのは雌が中心で，期間は35～38日間。その期間中は，雌は１日に１，２回巣を離れて，水を浴びたり雄の運んできたえさを食べたりする。そのときは雄が代わって抱卵する。抱卵中は雄が狩りし，育雛中は雌雄交替でえさを運びそれを雌がひなに分け与えるが，これはワシタカ類に共通して見られる習性である。

ひなは比較的成長が早く，そのため食欲はきわめて盛んで，空腹状態が続くと力の強いひなが弱いひなを殺して食べてしまうこともある。ひなが孵化して最初の１週間は，雌はほとんど巣から離れず，すぐ近くにくる鳥類を捕食する。やがて外敵から襲撃される不安がなさそうなときには，巣からかなり離れたところまで狩りに出かけるようになる。孵化

オオタカ（ワシタカ科ハイタカ属）のひな
まだ綿羽に包まれたひなのくせに
鋭い目とくちばしは森の狩人である親ゆずり。
ひなは成長が早く食欲もきわめて旺盛。
強いひなが弱いひなを殺すことがよくある。（上）
PH. HEIMPEL

ウタオオタカ *Melierax canorus*
ワシタカ科ウタオオタカ属
あしのすばらしく長いこのタカはアフリカ特産。
雄壮な狩りをみせるタカ類のなかでは珍しく
地上でトカゲや昆虫を捕食する。（下）
PH. C. DEKLEMN JACANA



後１か月ほどたつと，ひなは親鳥が運んできた獲物を，羽毛をむしり，くちばしでばらして自分たちだけの力で食べるようになる。40日ほどで巣を離れ，外へ出かけるようになるが，えさを食べるときは巣にもどってくる。孵化後10週間ほどした７月中旬には，独立していく。

オオタカもまた，家畜や狩猟用の獲物を捕殺する“害鳥”として，人間から激しく迫害され，またタカ狩りの主役として珍重されて狩られつづけてきた。たとえばイギリスでは，サセックス地方で最後のオオタカと思われる２，３つがいが狩猟管理人に1950年代に射殺されて以来，絶滅してしまった。他のヨーロッパ各国でも，似たような迫害を受けて数は激減してしまった。

日本では古く大和時代に大陸から導入されたタカ狩りが，時代とともに支配階級のあいだで盛んになり，江戸時代中期にもっとも盛んとなったが，その主役はオオタカだった。ほかに前出のハイタカ，後出のハヤブサも使われたらしいが，オオタカによる狩りがもっとも豪快であるとしてもてはやされたという。

オオタカの絶対数は少なく，獲物を狩るテリトリー（なわ張り）は巣を中心に半径６～８キロにおよぶ広大な地域である。最近の研究によれば，オオタカは獲物を狩りつくすどころか，動物の種族保存によい影響を与えているとされている。たとえば，ハトやウズラのようにきわめて繁殖力の盛んな種をえさにすることによって，その種の異常な発生を抑制しており，ヤマウズラの類についても，その雄がふえすぎてアンバランスになるのをおさえている，といわれる。

獲物のハトを食いつつ警戒を忘れないオオタカ。
夜行性猛禽類のフクロウ目の鳥と同じように
オオタカなど昼行性猛禽のワシタカ目の鳥も
首を180度回転して背後を見ることができる
オオタカは古くからタカ狩りの主役である。
PH. F. MERLET ATLAS PHOTO

## ツミ *Accipiter gularis*

ツミ（ハイタカ属）は数多いハイタカ属のなかでは小型のタカで，日本に生息するワシタカ類のうちでは最小。外見はハイタカに似ているが小型で，雄は全長約27センチ，雌で約30センチ，体重は雄が約90グラム，雌が約140グラムである。羽色は，背面は濃灰青色，腹面は雄が暗色で雌は淡色をしており，雌雄は大きさも羽色も異なるので，雄はエッサイという別名で呼ばれていた。日本のほか中国の北部，中部，南部で繁殖し，東南アジア各地で越冬するが，日本のものは冬でも少数が残っている。日本では平地や低山の森林にすみ，ツグミ級（体重100グラムほど）以下のスズメ目の小鳥を主として捕食している。生息数はハイタカよりもずっと少ない。





## ノスリ　*Buteo buteo*

ノスリ（ノスリ属）は，雄は全長約52センチ，体重500～1000グラム，雌は57センチ，700～1350グラム，トビよりやや小型の猛禽である。尾は幅広く，先端が丸く，短めである。羽色はきわめて個体差があるが，背面が暗褐色，腹面は黄白色で腹と胸に暗色斑がある。顔には暗褐色の横斑がある。

ノスリはヨーロッパのほとんど全域と大西洋のアゾレス，カナリー，マデイラ，ベルデ岬の各諸島からシベリアをへて日本にまでと，中国西部に生息している。部分渡り鳥で，北部のものはアフリカ，南アジアへ渡って越冬する。日本では北海道から四国までにふつうに見られる留鳥で，トビに次いでよく見られるワシタカ類である。

かれらが渡るときは，10羽から100羽のあまり緊密でない群れをつくって，高空を，数キロにおよぶ長方形を成しながら飛んでいく。

ノスリは，小高い丘，岩の上，高い木の上などにとまって，テリトリーに鋭い目を配りながら，獲物をじっと待ち伏せしている。かれらの獲物は，ネズミ，モグラ，ウサギ，リス，イタチなどの小型哺乳類，カエル，トカゲ，ヘビ，バッタなどの昆虫類のほかに，ヒバリ，ツグミ，スズメなどの小鳥からキジ，ヤマドリ，フクロウ類やカモ類まで，非常に広範囲であるが，主要なえさはあくまでハタネズミなどの齧歯類で，1羽のノスリの胃から30匹のネズミの残骸が見いだされたことがある。

しかし，他の猛禽類にも共通であるが，かれらの主食は地域の条件によってかなり異なり，その地方でもっとも容易に得ることができるえさに，より大きく依存することになる。

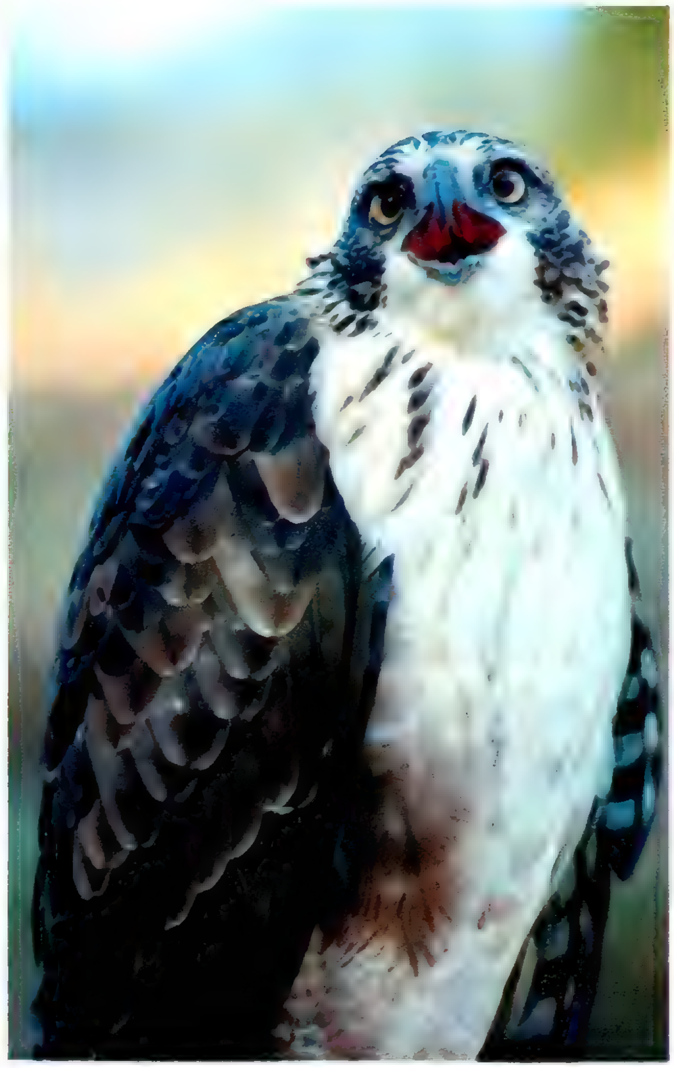
獲物を待つノスリは，からだをほとんど垂直に立て，頭を両肩のあいだに埋めて，羽毛をふくらませてじっと動かないが，いきいきした鋭い目はわずかな動きも見のがさない。あるいは長時間帆翔しながら，下の大地に目を配る。獲物を見つけると，つばさをたたんで急降下していき，それからつばさをひろげ，最後の数メートルはほとんど地面をこするように飛んでつめを大きく開いて獲物を押えこむ。

狩りのときのノスリは高く舞いあがることはないが，春の繁殖期には，高空はるかに舞いあがってきわめて軽快なディスプレー飛行をする。ネコのような高い叫びを出しながら輪を描いて帆翔したり，高空から急降下・急上昇したり，ときには宙返り飛行をして見せ

ノスリ（ワシタカ科ノスリ属）
捕獲物の腹部から羽毛をむしりとる
おこぼれにあずかろうとしているのはカササギ
ノスリの主食はあくまでネズミなど齧歯類で
不消化物はペリットにして吐きだす（上）
PH. BILLE

深い谷に囲まれた険しい岩場に
ノスリのひなが，すくすくと育っていた
日本に生息するワシタカ類のうちでは
トビに次いで個体数が多い鳥で
ほかにケアシノスリ，オオノスリもすむ（下）
日本の山中にて　撮影・





る。しかしふだん飛んでいるときは，さほどスピードはなくやや重たげである。

2月下旬には，つがいは前年の巣にもどって補強するか，新しく造巣を始める。巣は地上数メートルから10数メートルの二股に枝分れした樹上や，岩壁や，あるいは地上につくられる。カラス類の古巣を補強して使うこともある。

巣の直径は60～90センチ，厚さ40～70センチ，基礎の部分は太い枝でがっちりつくり，上の部分は小枝を使う。産座には小枝やコケ類を敷く。1腹の卵数は3個，まれには4個で，4月から7月にかけて3～5日の間隔で産卵する。卵は緑がかった白色の地色に褐色の斑点がある。

抱卵は主として雌が行ない，期間は30日前後。孵化後7週間でひなは飛べるようになるが，その後もかなりの期間，ひなは親鳥に育てられる。

ノスリ類には25種あるが，このうち日本ではノスリのほかに，**ケアシノスリ***Buteo lagopus*と**オオノスリ***Buteo hemilasius*がごくまれに見られる。ヨーロッパの代表的ノスリ類としてはこれらのほかに，**ニシオオノスリ***Buteo rufinus*（以上3種ともノスリ属）がある。生態はともにノスリに似ている。



サシバ（ワシタカ科サシバ属）
かつては都市近郊の疎林にもすんだ中型のタカ
都市開発の波が急速にかれらのすみかを奪い
いまはすっかりその数が減ってきている
それでもまだ，ノスリに次いで多い（上左）
撮影・[illegible]

クマタカ（ワシタカ科クマタカ属）
日本のワシタカ類ではイヌワシに次いで大きく
イヌワシとならぶ日本最強の大型猛禽類
獲物の背後から矢のように迫って豪快に狩る
この猛禽を使う狩りが東北地方に残る（上右）
[illegible]にて　撮影・[illegible]

クマタカは九州から北海道までの森林にすみ
キジ，ヤマドリ，ウサギ級の動物を捕食する
ふつう3，4月に2，3卵を産んで育てる
イヌワシにくらべれば個体数はかなり多いが
森林開発による環境破壊で数は減っている（下）
和泉山地三国山にて　提供・南大阪野鳥研究会



## サシバ　*Butastur indicus*

サシバ（サシバ属）は日本の中部、南部と中国の東北部あたりだけで繁殖する中型のタカである。全長は50センチ前後でノスリより小さく、羽色は背面が赤みがかった褐色、腹面は白と赤褐色の横縞模様になっており、長めの尾には暗色の太い横帯が4本ある。のどは白く、両側と中央に黒い縦線が走っている。

サシバ属にはほかに3種あるが、それらはアフリカと南アジア、東南アジアに分布していて、日本にはいない。そしてサシバも、日本などにいるのは繁殖期だけで、秋には東南アジアに渡去してしまう。

サシバは関東以西（山形県まで知られている）、九州までの低山、丘陵地に比較的ふつうに見られる（もはや見られたと過去形でいうべきかもしれない）鳥である。しかし西日本では、日本のワシタカ類ではトビについで数の多いタカで、春に渡来してからしばらくの間、山すその上空を帆翔しながら、「ピックィー」とか「キンミー」とか聞こえる声でよく鳴いている。

日本のワシタカ類ではトビの次によく鳴く鳥といえよう。この鳴き声から、キンメダカ（金目鷹）という別名をもらっているくらいである。

サシバは主として地上の小動物（トカゲ、カエル、ヘビ、大型昆虫など）を食べる鳥で、狩りは開けたところでするので、広く続く森林にはすまない。しかし安全な樹上に営巣（えいそう）するために、ある程度の林がないといけないようである。日本の低地では、こうした林とこれらの獲物が残された地域は、急速にせばまる一方で、市街地でもふつうに見られたこのタカの姿が、われわれの視界から消えていこうとしている。

サシバで興味深いのは秋の渡りである。九州南端の佐多岬では、毎年渡りのシーズンになると各地からサシバが集まってきて、次々と高空へ舞いあがっては列をなすようにして、沖縄列島をへて南方へと渡っていく。

## オウギワシ　*Harpia harpyja*

オウギワシ（オウギワシ属）は、南アメリカにいるすべてのワシタカ類のうちで最大にして最強、もっとも攻撃的な鳥である。頭部を黒い扇形の冠羽（かんう）が飾っている。全長96センチほど、体重は雌では実に7.5キロ、雄では5.8キロ前後。この巨大なからだに、大きな鋭いつめとくちばしを持つ。羽色は背面と胸部が黒、腹部が白、頭部は明るい灰色で、尾はオリーブ褐色で黒い横斑がある。

分布域はメキシコからアルゼンチンの北西部にかけてで、とくにアマゾン川流域の深い密林地帯に多く生息する。

獲物はオマキザル、ナマケモノ、オポッサム、ハナグマ、キノボリヤマアラシなどの中型哺乳類と、南アメリカ特産のコンゴウインコ類などで、密生した樹木のあいだを時速60～80キロという速さで飛行し、獲物の動きを見ると瞬間的に襲いかかる。あるいはかなりの速さで上昇していき、ときどき停止飛行しながら周囲を注視し、獲物を見るや急降下する。サル類はこの鳥の姿をちらとでも見ると、すさまじい悲鳴をあげて逃げまどう。

オウギワシの狩りは壮絶で、たとえば木に必死でかじりついているナマケモノを楽々と木から引きはなしてしまう。捕えた獲物は、中型の哺乳動物なら軽々と空へ持ちあげてしまう。飼育下での研究から、オウギワシは1日平均230グラムを食べたという。

オウギワシは、周囲でいちばん高い木に造巣する。巣は地上数十メートルの高さにあることが多い。直径1メートル以上、厚さも60センチという巨大な巣である。巣はつづけて何シーズンも使うことが多く、毎年補強する。くわしい生態はわかっていないが、1腹の卵数は1個らしい。

インディオは、幼鳥を捕えて飼育し、装飾用に冠羽をとったり、交易品にした。生きたオウギワシを飼っている者は、仲間からたいへん尊敬された、という。

## クマタカ　*Spizaetus nipalensis*

クマタカ（クマタカ属）は、タカという名をもっているが、むしろ後出するワシ類に含めたほうがいいような、強力な大型猛禽である。日本に生息する猛禽類のなかでは、イヌワシ（後出）と並ぶ最強の鳥といえよう。

全長は70～80センチ、つばさの開張は1.5メートル前後もあり、体重は2、3キロもある。羽色（うしょく）は、背面とつばさは黒褐色、頭部と腹面は白くて黒褐色の縦斑がある。尾

オウギワシ（ワシタカ科オウギワシ属）は
南アメリカにすむワシタカ類のうち最大で最強
鳥類の王者のひとつであることはまちがいない
アマゾン川流域の深いジャングルにすんで
サルやナマケモノを獲物にしている（上）
*PH HOLMES LEBEL*

ワシタカ類は個体による羽色の差が大きいが
このノスリも個体差がとくに大きい
写真のようにテリトリー内の小高いところで
じっと周囲を警戒している姿は
この鳥の特徴的なポーズのひとつ（右）
*PH REINHARD TIERFOTO Z.F.A.*

カタシロワシ（ワシタカ科イヌワシ属）
山ワシ類のなかでもイヌワシは高地の森林にすみ
カタシロワシは平地の森林にすみわけている
ワシタカ類独特の威厳に満ちたプロフィールだが
イヌワシほどには攻撃的でない　（**115**－10,11）
*PH D. ZINGEL Z.F.A.*









サンショクウミワシ *Haliaeetus vocifer*。ワシタカ科オジロワシ属。このワシはオジロワシとともに典型的な海ワシ類のひとつ。アフリカ大陸の特産種。海ワシ類はイヌワシなどの山ワシ類と異なって，主食は魚類，両生類，爬虫類などで，跗蹠の下部まで羽毛がはえていない。このワシは海岸や大きい河川に沿った地域にすみ，テリトリーは数キロにおよぶ。 *PH. B. CAMPBELL*



は暗色と白の太い横縞になっている。後頭部の羽毛（うもう）は冠羽（かんう）状になっている。つばさは幅広く，飛行するときは初列風切羽（しょれつかざきりばね）がゆびのように開いて見える。

分布域は，ヒマラヤから中国南部にかけてと，日本，セイロン，インドなどで，日本では北海道から九州にかけての森林にすんでいる。日本は分布の北限に当たり，日本のクマタカが最大である。

クマタカの獲物は，森林内の地上にいるキジ，ヤマドリ級の鳥やウサギ，タヌキ級の哺乳（ほにゅう）類が主である。狩りは，豪快そのものだ。上空や樹上からねらい定めた獲物に向かって急降下し，つばさをすぼめて低空を滑空して背後から獲物の後頭部につめの一撃を加え，文字どおりワシづかみにする。あばれる獲物を両方のつばさで押えつけて，あしで締めつけて絶息させる。

こうした狩りのやり方は，飼いならして狩りに使うにはもってこいで，山形県などではクマタカを使ったタカ狩りが現在もわずかながら継承されている。

繁殖期は日本では３，４月で，１腹の卵数は２，３個。卵は灰白色で無斑である。抱卵（ほうらん）は雌が受け持ち，雄が給餌する。ひなは白い綿羽に包まれている。ひなが巣立つのは６～８月で，そのあともしばらくは親の養育を受けている。

クマタカは森林性の鳥で，人間の目につくのは上空を帆翔しているときだが，木の梢や林のなかの枝にとまってじっとしていることのほうがずっと多い。クマタカが生息できるような広い深い森林は，日本からいま急速に失われようとしている。イヌワシにくらべればまだその個体数は多いようだが，しかしこのまま進めば，この魅力的な大型猛禽の将来も，まことに暗澹としているといわねばならない。

## エボシクマタカ

*Lophoaetus occipitalis*

エボシクマタカ（エボシクマタカ属）は全長約60センチ，羽色は暗褐色でつばさの下面は白，尾には白と褐色の斑がある。頭頂にはその名のとおり高く幅広い三角形の冠羽が，まっすぐに立っている。

サハラ砂漠以南のアフリカ全域に生息し，水の流れに近い場所を好む。アカシア類の樹木の頂上などにとまって，目を半分閉じて，冠羽をまっすぐに立て，からだじゅうの羽毛をふくらませている姿がよく見られる。

獲物はネズミ，リス，スズメ目の小鳥，ハトなどで，発見するとそれまでのようすとは一変してすばやく襲いかかる。齧歯（げっし）類，鳥類を主食とするが，爬虫（はちゅう）類，昆虫（こんちゅう）類も捕食し，多少植物質のもの（とくに野生のイチジク）も食べるようである。

巣は樹上につくり，小枝と木の葉を使い産座には鳥の羽毛，動物の毛などを敷く。からだのわりには小さな巣である。

産卵は８～10月で，１腹の卵数は１，２個，卵は白地に赤褐色の斑点がある。

## ゴマバラワシ

*Polemaetus bellicosus*

ゴマバラワシ（ゴマバラワシ属）はアフリカのワシタカ類のなかでは最大最強であろう。後頭部にある短い幅の広い冠羽が特徴的だ。全長は１メートルに達する。羽色は背面と胸部は褐色の光沢がある黒っぽい色で，腹面にはその名のとおりゴマをふったような黒い斑点がたくさんある。尾には横斑がある。

ギニアからコンゴにかけての熱帯雨林を除いたサハラ砂漠以南のアフリカに生息している。ぽつんと孤立した樹木にとまって，たえず周囲を見張っている。つがいのテリトリー（なわ張り）はかなり広大である。

狩りの獲物は，イワダヌキ，齧歯類，小型

ゴマバラワシ。ワシタカ科ゴマバラワシ属
アフリカにすむワシタカ類では最大最強か。
奥深いジャングルを中心に生息し
小型のアンテロープ，ヒヒ，ホロホロチョウなど
かなり大きな獲物を捕食している。
PH. J.-F. & M. TERRASSE



のアンテロープ，ホロホロチョウなどキジ目の鳥，などである。ときには小型のサルやヒヒなどを襲うこともある。

巣は大木の頂上や，岩棚の上につくる。太めの枝を組みあわせ，コケ類や草の茎を積む。直径1.5～2メートルもあって，人間がすわってもびくともしないほど頑丈である。何シーズンもつづけて使われ，巣のなかには獲物となった動物の骨などが散乱している。

1腹の卵数はほとんど1個で，雌が抱卵し雄がえさを運ぶ。

## アフリカクマタカ
*Hieraaetus fasciatus*

アフリカクマタカ（アフリカクマタカ属）は全長約70センチ，つばさの開張は1.7メートルにおよび，体重は1.6～2キロある。ワシタカ類のなかではすらりとしたからだつきである。羽色は背面とつばさの上面は暗褐色で腹面は白く黒い縞がある。これには3亜種があり，ひとつはヨーロッパ南部，アフリカ北部，小アジアと南アジアから中国にかけて生息し，ひとつはサハラ以南のアフリカ，ソマリアからアンゴラにかけて生息し，他のひとつはスンダ列島にすむ。フランスでは南部にごく少数が分布する。

アフリカクマタカは，乾燥した山地に好んですみ，冬には平地に下るが渡りはしない。活動的できわめて攻撃的な鳥で，ハヤブサのような飛行スピード，ハイタカのような妙技，イヌワシのような勇敢さなどあわせもっているといえよう。

主食はカラス，ヤマウズラ，ハト，水鳥類などの鳥類と，ウサギ，ネズミなど小型哺乳類である。この鳥は，ほとんどすべての鳥と小型哺乳類を激しい恐怖におとしいれる。後出のチュウヒやミサゴなどをあまり恐れない大型の水鳥類も，この鳥の姿にはパニック状態となり，オオバンはアシの茂みに隠れ，カモはこのワシが見えなくなるまで水にもぐってしまう。

アフリカクマタカは，ふつうは切りたった絶壁の頂上に近い棚などに造巣するが，アフリカでは樹上の場合が多い。小枝で巣の骨組みをつくり，産座には鳥類の羽毛を敷く。1腹の卵数は2個，卵は白色で，斑点がついていることもある。産卵期は地方によって異なるが，フランスでは2～4月で，抱卵は主として雌が行ない，40日ほどで孵化する。ひなは孵化後65日ほどで飛べるようになるが，その後もかなり長く，ときには，翌年の繁殖シーズンまで親のそばにとどまっていることもある。

**ヨーロッパクマタカ***Hieraaetus pennatus*（アフリカクマタカ属）はアフリカクマタカとかなり近縁の鳥で，イベリア半島，バルカン半島，ヨーロッパ中央部，アフリカ北部，小アジア，コーカサス地方に分布している。明るい羽色の淡色型がふつうよく見られるが，ほかにからだの腹面全体が濃い褐色の暗色型がある。習性は，アフリカクマタカによく似ている。

## イヌワシ　*Aquila chrysaetos*

ワシタカ類のうち，大型のものをワシと呼んでいるが，さらにワシは森林性で鳥類や小型哺乳類を獲物にする山ワシ類と，海べで魚類などを巧みに捕食する海ワシ類に分けることができる。山ワシ類の典型のひとつが，このイヌワシ（イヌワシ属）である。山ワシ類には，イヌワシ属*Aquila*に属するものがかなり含まれている。

山ワシ類は跗蹠（ふしょ）に羽毛がはえていることが海ワシ類と異なる。かれらは高空を自由に帆翔し，獲物は地上で捕えるが，屍肉のように容易に得られるものもよくあさる。個体数も少なく繁殖力も弱いので，強力な保護策をとらないと絶滅してしまうだろう。

イヌワシはワシ類のなかでも大きく，力が強い。古くから伝説上の主役として，力と不敗のシンボルとされていた。全長は80～95センチ，つばさの開張は2メートル以上に達し，体重は3.5～6キロである。羽色はいくぶん黄橙色がかった褐色をしていて，後頭部は黄色をおびている。幼鳥は尾のつけ根とつばさに大きな白斑がある。日本では陸鳥のうちでは最大最強の鳥である。

分布域はきわめて広く，ヨーロッパ，アジア，北アメリカ大陸と北半球の大部分におよんでいる。日本では北海道から，おそらく四国まで，主として山岳地帯に生息しているが個体数はきわめて少ない。ヨーロッパやアメリカの各地では，この威厳に満ちたすばらしい猛禽を猛烈に狩りとったために，いまやその数は激減してしまった。すでに中央ヨーロ



ヨーロッパクマタカ。
ワシタカ科アフリカクマタカ属。
この鳥も暗色型と淡色型の羽色の違いがあり
写真の鳥は暗色型。
ヨーロッパではよく見られる大型のタカ。（上）
PH. J. A. FERNANDEZ-BRUCE COLEMAN LTD.

アフリカクマタカ。
ワシタカ科アフリカクマタカ属。
乾燥した山岳地帯の険しい岩場に巣を構えて
ハヤブサのスピードとハイタカの妙技と
イヌワシの勇敢さをもつ魅力的な猛禽。（下）
PH. J. F. & M. TEPRASSE

イヌワシ（ワシタカ科イヌワシ属）は山ワシ類の
代表格。日本のワシタカ類では最大最強の猛禽。
大きく成長した若鳥に獲物を与える親鳥。（右上）
巣立ちして谷間の上空を飛行する若鳥。（右下）
成鳥になるとつばさと尾の白斑がなくなる。
撮影　竹丸勝朗（右上）　PH. BILLE（右下）

ッパではほとんど絶滅してしまったが，ヨーロッパ北部，南部，西部にはわずかに繁殖している。フランスではピレネーやアルプスの山地に点々と50つがいほどいると推定されている。

イヌワシは，樹木の比較的少ない山岳地帯にすみ，断崖の岩棚や太い樹上に巣をつくる。森林や海べの断崖や平野に姿を見せることもあるが，まれであり，ごく限られた地方でだけ見られることである。イヌワシのテリトリーは広大で，40平方キロにおよぶものもあり，1年を通じてつがいでそこにすんでいる。本来は留鳥（りゅうちょう）だが，ときには移動することもあり，とくに若鳥は自分のテリトリーを求めて不規則に移動することがある。イヌワシの成長はおそく，4歳で成鳥となる。繁殖期が近づくとつがいの相手を捜し，気にいったテリトリーを定めて落ちつく。

イヌワシは毎日テリトリーを巡視する。視覚はたいへん鋭く，わずかな動きも見落としそうにない。つがいは，そろって巣から飛びたち，谷間に向かってスピードにのって下降していく。つがいは，ある一定の距離を保ちながら進む。先のものの目をのがれた獲物も，あとのものが発見できるからであろうか。

高空を帆翔しながら，地上に獲物の動きを発見すると，ねらいをつけるかのようにらせん状の飛跡を描きながら下降していく。それからつばさをすぼめて，まさに矢のように斜めに地上へ突っこんでいく。たくましいあしの巨大な鋭いつめは，獲物の急所に打ちこむために前方に突きだされる。この最初の一撃で，たいていの獲物は即死するが，もし抵抗







すれば，まずつめて相手の目をつぶし，頭部をあしで激しくたたいて相手の力を弱める。獲物はあしでつかんでねぐらへ運ぶ。

獲物を料理するには，まず頭部を細かく切り裂き，骨を砕き，うまく骨が砕ければ骨もろとも飲みこんでしまう。食べながらときどき休み，周囲を鋭く警戒する。木の葉のわずかな動きにも，"きっ"と警戒の表情を見せる。

イヌワシには，人間のほかに天敵はまずない。かれらにとって，ほとんどの動物が狩りの対象となる。えさは地域によってさまざまに違うようだが，アルプスではとくにモルモット，ライチョウ類，ウサギ類，齧歯類，ときにはキツネの幼獣や子ヒツジ，子ジカなどを捕食するほか，動物の死骸も食べる。ヘビやカメ，ごくまれに魚も食べるようである。

繁殖期は，前年の幼鳥が独立してすぐの11～12月ころにもう始まる。つがいは巣を補強するために木の枝を運びはじめ，３月には造巣作業は本格的になる。巣は，風をよく避けた岩のくぼみ，大木の葉が密生した頂上部などにある。巣の骨組みは枯れ枝でつくるが，イヌワシはこれらを地上で集めるだけでなく，ある高さからねらった枝に体当りして折りとることもするらしい。産座にはかわいた小枝やコケ類を敷く。巣は毎シーズン補強されて，古いものでは直径２メートルを越す。産座は直径70～80センチほどである。

１腹の卵数はふつう２個で，３，４日の間隔で産む。そのうち１羽のイヌワシが成長するのがふつうである。卵はからだのわりに小さめで丸く，表面はざらざらしていて，白地に灰色と褐色の不規則な斑がある。抱卵は主として雌がするが，雄も抱くことがある。抱卵期間は約６週間。

孵化したばかりのひなは，羊毛のような灰白色の綿羽に包まれている。ひなはゆっくりと成長していき，７月の下旬を過ぎてはじめて飛べるようになる。ひなははじめはほとんど動かず，ときどき頭を回すだけで，かかとをおろしてじっとしている。やがて，飛ぼうとでもするように，まだよく発達していないつばさをひろげるようになる。次にはゆびでからだをささえて，巣の前縁に沿って跳びはね，自分の眼前に開いている深淵をせんさくするように見まわしたりする。つばさでからだをささえられるようになると，ぱっと飛びあがって巣を離れる。

孵化後３週間は，雄がえさを運び雌はそれを細かくちぎってひなに与える。この期間が過ぎると，つがいはそろって狩りに出かけるようになる。このころには，親鳥からたくさんのえさをもらったよりたくましいほうのひ

急峻な絶壁のねぐらに休むイヌワシの若鳥２羽。
イヌワシはふつう２羽のひなが孵化するが
一方が他方をつつき殺してしまうことが多く
写真のように２羽が育つことは多くはない。
イヌワシの個体数は世界的に少ない。

*PH. BILLE*



ながただ1羽だけ、生きのこっている。

はじめのうちは親鳥が運んでくるえさを食べきれないこともあるが、育雛（いくすう）期の後半には食物が残ることはまったくなくなり、食欲盛んなひなは飢えを訴えつづけることになる。孵化後80日ほどでひなは巣立ち、親鳥を追いかけて鋭く叫びながらえさをねだるようになる。家族はこうして11～12月ころまでいっしょに暮らす。

イヌワシはきわめて繁殖力が弱い。つがいのなかには、何が原因か明らかではないが、繁殖シーズンがきても産卵しないものもある。また多くのつがいは、すでに述べたように卵を2個孵化させるが、1羽のひなしか育たない。3、4日のずれ（これは産卵日のずれと同じ）で孵化したひなは、当然その大きさが違う。もし先に生まれたひなが雌であとのが雄だとすれば、雌はつねに雄より大きいので大きさにはいっそう差ができる。先に生まれた大きくて力のあるひなが、劣弱なひなを殺して生きのこっていくことになる。

イヌワシに近縁のワシ類のうち、次のものをあげておこう。

**カタジロワシ** *Aquila heliaca*（イヌワシ属）は、平野の森、ステップ、沼沢地などに好んですむ。分布域はイベリア半島、東ヨーロッパ、中央アジアから中国にまでおよんでいる。

ソウゲンワシ（ソウゲンワシ……イヌワシ属）
中央アジアのステップをはじめ、
アフリカや南アジアの大草原にすむ
かれらの獲物はあまり大型ではなく
主として草原の齧歯類を捕食する（上）
PHILIP JACKSON

**カラフトワシ** *Aquila clanga*（イヌワシ属）は、東ヨーロッパと中央アジアのステップから中国東北部にかけて生息している。日本では迷鳥として2回ほど捕獲されたことがあるだけである。

**アシナガワシ** *Aquila pomarina*（イヌワシ属）は中央ヨーロッパと小アジアに生息している。インドには亜種がいる。その名のとおりきわめてあしが長い。

**ソウゲンワシ** *Aquila rapax*（イヌワシ属）はアフリカ、中央アジア、南アジアの原産種だが、ヨーロッパの南ロシア地方でも繁殖している。その名のようにサバンナやステップの草原に好んですみ、迷鳥として地中海沿岸の国々に現われることがある。

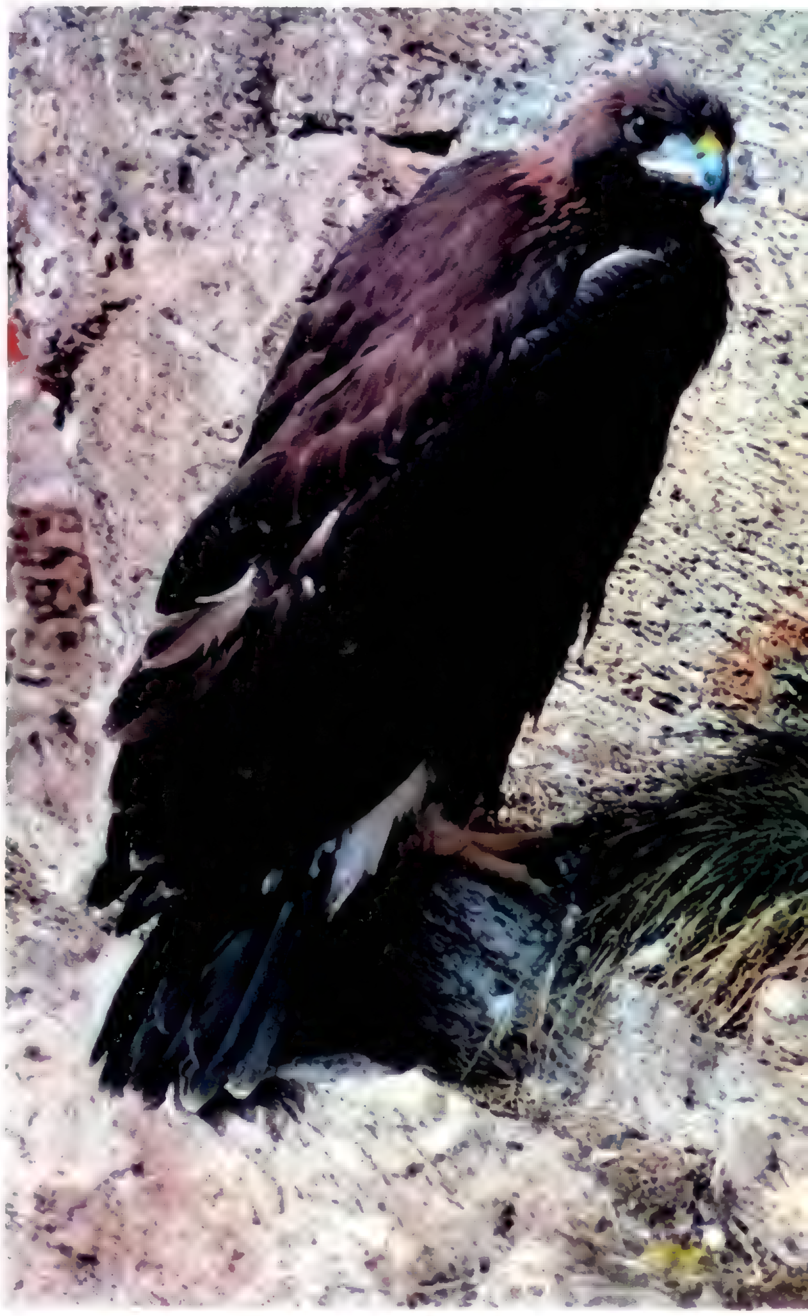
## オオイヌワシ　*Aquila audax*

オオイヌワシ（イヌワシ属）は全長1メートルほど、つばさの開張は2.4メートル、羽色は背面がチョコレート色でその他の部分は黒い。つがいか、または単独でオーストラリア、タスマニア、ニューギニアの森林や平野に生息している。

習性はイヌワシにきわめて近く、とくに平原や荒地の斜面にいるワラビーなどカンガルー類の小さい種や、カンガルーの幼獣を捕食する。またオーストラリアオオノガン、ヒツジの幼獣、ウサギ類も獲物にする。

オオイヌワシはカンガルーの成獣を殺すことはできないので、母カンガルーを追いかけまわして、休みなく攻めたてて、腹の袋にいる子カンガルーをついに捨てなければならないように追いつめて、子をさらっていく。しかしカンガルー類の数は現在激減しており、そのため獲物は、オーストラリアの牧畜業に重大な損害を与えているウサギ類にとって代わっている。オーストラリアにとっては願ってもないことである。

このワシは地面からあまり高くない樹上に巣をつくる。人目にはなかなかつきにくい。つがいは何シーズンもつづけて同一の巣を使うので、年々大きくなっていく。骨組みは枝でがっちりとつくり、産座には草や小枝を敷く。8月に産卵し、1腹の卵数は2個である。卵は表面がざらざらで、丸い形をしていて白地に褐色の斑点がある。



巣立ちしようとするイヌワシの若鳥
かれはやがて親鳥の指導で狩りを習得し
すばらしい速さで獲物に迫り
必殺の一撃で相手を倒す鳥類の王になる日も近い
しかしかれらの最大の敵は"開発"（下）
PH BILLE





オジロワシ（ワシタカ科オジロワシ属）は
魚類をおもな獲物とする海ワシ類の代表格。
日本では北海道東部にごく少数が繁殖する。
サケ，マスなどの大型の魚をとるほか
海岸に打ちあげられた動物の屍肉もあさる。（上）
撮影　森　信也

魚をつかんで飛びたつサンショクウミワシ。
この鳥はアフリカではいたるところにすむ。
小型の魚は上空からダイビングして捕え
大型の魚は水面を低く飛びながら捕えて
そのまま近くの岸までひきずっていく。（下）
PH. J. F. & M. TERRASSE

## オジロワシ　*Haliaeetus albicilla*

オジロワシ（オジロワシ属）は，海ワシ類の代表格である。海ワシ類は山ワシ類とは，跗蹠の下部まで羽毛がはえていない点が異なっている。いずれも巧みに魚類を捕える。

オジロワシは全長約1メートル，つばさの開張は1.8メートルから2.5メートルに達するものもある。体重は雄は5キロを越えないが，雌では6.5キロに達するものもある。大きさは地域で差があり，グリーンランド産のものがもっとも大型である。羽色は，その名のとおり尾は白く，他の部分は暗褐色，頭部がやや淡い。つばさは幅広く，初列風切羽がゆびのように分かれていて，尾は短めで円形をしている。くちばしとあしはあざやかな黄色でよく目だつ。

東ヨーロッパ，北ヨーロッパ，バルカン半島，小アジアと中央アジアおよび北アジアの大部分，アイスランド，グリーンランドの南部などの海岸地帯で繁殖しているが，各地でその数は減少していて絶滅の途上にあるのではないかと思われる。日本では北海道東部でごく少数が繁殖しているが，冬期には北海道各地から本州へも渡ってくる。

オジロワシは砂浜によく姿を見せ，海べをめったに離れない。大きな河川や湖で姿を見ることもある。若鳥は，海からかなり遠く離れた内陸にまで入りこむが，成鳥になるまでの数年間，はっきりした目的もなく放浪生活をしているようである。

部分渡り鳥で，スカンジナビア半島北部，ラップランド，ソ連の北部など北極圏のものは厳冬の結氷期には南へ移動し，河川をさかのぼって内陸にはいりこんだり，南ヨーロッパやアフリカ北部へ渡るものもある。

オジロワシは，その堂々たる姿にもかかわらず，抵抗のない獲物をねらうことが多い。もっとも主要なえさは，サケ，マスなど大型の魚類で，上空からダイビングしてつめで魚をひっかける。海鳥を捕食し，まれにキツネ，シカ，ヒツジ，アザラシなどの幼獣を襲うこともある。そのほか海面に浮く死魚や，海岸に打ちあげられた動物の死骸を食べることも多い。魚の残骸を求めて漁船を追ってくることもある。

魚について主要なえさは水べに集団営巣する水鳥の卵やひな，ときには成鳥であるが，カモ，オオバン，ガン，ハクチョウなどが獲物にされる。これらの水鳥のコロニー（集団営巣地）は，定期便のようにやってくるオジロワシに荒らされることがよくある。

内陸のステップ地帯では，ネズミやレミン



グなどの齧歯類を食べることもある

このワシは，繁殖期以外は小さな集団で生活することがよくある。群れは午前中は盛んにえさを食べ，その後しばらく休息する。午後は２度めの狩りをやるが，ときには薄明時まで狩りを続けることもある。群れは夕方になると，木の茂みや岩壁のなかにあるねぐらにもどる。地上では，イヌワシ類より歩くのはうまいが，空を飛ぶときはかれらほどスピードはなく，重たそうである

繁殖期は３月に始まる。つがいは自分のテリトリーには強い執着を示す。テリトリー内にはふつう数個の巣があって，交互にそれを使っているようだ。巣はふつう断崖の岩棚につくるが，海岸や川べりに森林があれば樹上につくることもある。まれに地上につくることもある。雄が巣材を運び，雌がそれで補強する

巣は毎シーズン補強されるために，直径1.5～２メートル，厚さも小は30センチから大は１メートルのものまである。極北にすんで渡りをするものは，毎シーズン新しく巣をつくりかえるようである

ディスプレー飛行は，雄と雌がたがいに鳴きながら追いつ追われつして，帆翔，急降下，あるいはつめとつめをからめあったままの落下飛行などを繰り返す

産卵は３月の下旬ころで，１腹の卵数は２個，まれには３個，４日ほどの間隔で産む。卵は円形で白色をしていて，斑点があるものもある。第１卵から抱卵し，抱卵は主として雌がする。抱卵中は雄は巣の近くの小高い場所にとまって，周囲への警戒を怠らない

抱卵期間は平均38日で，ひなは灰褐色の綿羽におおわれている。ひなどうしが殺しあうことはしないらしい

孵化直後の５，６週間，親鳥はもっぱら巣の近くで狩りをして，ひなへの用心を欠かさない。６週間たつと，ひなは自力でえさを食いちぎれるようになり，８週間で羽毛がはえそろい，10週間で飛べるようになる

親鳥たちはさらに４，５週間，ひなに給餌し

ハクトウワシ（タカ目タカ科オジロワシ属）は
北アメリカ大陸に広く分布していたこの鳥は
ＤＤＴをはじめ農薬公害をもろにうけて
繁殖力が急激に低下したために
アラスカとフロリダ以外は絶滅寸前だ（上）
*PH. HOLMES LEBEL*

オオイヌワシ（タカ目タカ科イヌワシ属）は
オーストラリア，タスマニアなどにすみ
カンガルー，ヒツジ，ウサギなどを捕食する
オーストラリアの牧畜業者にとっては
ウサギ退治をしてくれるありがたい益鳥（下）
*PH. F. ERIZE*







オオワシ（ワシタカ科オジロワシ属）は
オジロワシより大きく海ワシ類では最大。
日本は繁殖地ではないが主越冬地のひとつ。
だが“開発”はかれらの越冬地さえ奪いつつある。
黒，白，濃褐色の対比が美しい。（上）
撮影 森 信也

ハクトウワシはアメリカの国鳥として有名。
白色の頭部，黄色いくちばし，濃褐色のからだは
美しいコントラストで威厳と気品を感じさせる。
しかしアメリカ文明はこの国鳥を迫害しつづけ
絶滅の危機にまで追いつめてしまった。（下）
PH. M. BECKER/Z.F.A.

て養育する。若鳥は，翌年まで，長いときは3年間も親鳥のテリトリーのなかで暮らしていることがあるが，繁殖期がきても，親鳥が若鳥を追いはらうようすはなく，家族がむつまじく生活しているようである。若鳥は少なくとも5歳にならないと，繁殖しない。

## オオワシ

*Haliaeetus pelagicus*

オオワシ（オジロワシ属）は海ワシ類中最大の強大な鳥で，雌は体重7～9キロに達する。雄は5，6キロである。羽色は黒褐色で，つばさの一部，腰から尾，腿が白く，くちばしとあしは黄色い。

オホーツク海北部の沿岸と朝鮮半島北部でだけ繁殖し，日本には少数ながら各地に越冬しにくる。日本は主越冬地のひとつであるが，日本に渡来する数からするとかれらの個体数はひどく少ないようである。

しかしオオワシの越冬適地も，日本では開発が進行してしだいに範囲がせばめられてきた。

習性はオジロワシに似ていて，死にかかった魚や，海獣の死体や，鳥類などを食べる。北海道では，オジロワシといっしょにいるオオワシの姿を見かけることがある。

## ハクトウワシ

*Haliaeetus leucocephalus*

ハクトウワシ（オジロワシ属）もオジロワシに近縁の海ワシ類で，北アメリカ大陸の特産種である。アメリカ合衆国の国鳥として有名である。全長約85センチ，つばさの開張は2メートルを越す。その名のとおり，頭部が美しい白色で，尾も白い。他の部分は黒褐色をしている。他の海ワシ類と同じでくちばしは黄色い。

ハクトウワシは以前は北アメリカのほぼ全域にすんでいたが，現在は激減した。これはDDTなど大量の農薬散布の結果，汚染された魚類を主食とするこの海ワシの体内にDDTが蓄積して，繁殖能力を減退させたからだと考えられている。

いまは，フロリダ半島とアラスカを除く地域にはごくわずかしか生息しない。

このワシは，主食は大型の魚で空中からみごとなダイビングで捕えるが，ほかにガン，カモ，シギなどの鳥類，ネズミ，リス，ウサギなどの小型哺乳類も捕食する。

# ワシタカ目のおもなグループとその生活　その2

浦本昌紀

前号に引きつづき、本号ではワシタカ科の残りとハヤブサ科について通覧していこう。

### 7．ノスリ類（約50種）

ノスリ属は約25種を含み、その半分以上が南北アメリカ産で、アフリカ産は3種しかなく、残りの種がヒマラヤ以北のユーラシア大陸（旧北区）産である。ノスリ属の鳥は、ハイタカ属の鳥とは違って、典型的には開けた場所や疎林をすみ場所とし、小獣や小鳥を地上で捕えるタカである。なかにはトカゲ、ヘビ、昆虫（こんちゅう）、ムカデなどをかなり食べるものがあり、それを主食にしている種さえあるが、鳥を主食とするものは1種もいないし、獲物を空中や樹上でとるものもいない。かれらは、ハイタカ属とは違った方向に発展してきたひとつのグループの頂点、または中心をなすものといえる。

これに近縁な属は熱帯アメリカに7属、アフリカと南アジアに2属あり、やはりアメリカに多い。

旧世界産のサシバ属の4種のうち、3種はアフリカと南アジアに分布してサバンナなど開けた場所にすみ、サシバ1種だけが東北アジア産（冬は南アジアへ渡る）で、樹木の多い山地にすむ。かれらは4種ともそこの地上でヘビ、トカゲ、カエル、昆虫などをとる。アフリカ産のトカゲノスリ *Kaupifalco monogrammicus* もかれらに似た習性で、名まえから考えられるようにトカゲを主食にしているのではないらしい。熱帯アメリカでは *Leucopternis*〔属〕の10種が森林性で、樹上でトカゲやヘビをとるという点でノスリ類としては変わっているが、そのほか *Parabuteo unicinctus* や大型のチリーワシ *Geranoaetus melanoleucos* といっそう大きな *Harpyhaliaetus*〔属〕の2種（1種は森林性）などはノスリ属の鳥に似た習性をもっている。

一方、同じ熱帯アメリカには水辺や沼地にもすむヌマワシ属 *Buteogallus* の3種（1種はカニを主食としている変り者である）と *Heterospizias meridionalis* があって、ヘビやトカゲのほかに魚やカエルやカニを食べ、その傾向をさらに進めて魚食性となったウオクイノスリ *Busarellus nigricollis* が海ワシ類のいない南アメリカでそれに相当する生活を営んでいる。

### 8．オウギワシ類（4種）

世界には巨大なワシが2種あって、どちらもちょっとノスリ類に似たところがある。ただし、かれらがノスリ類と、また相互に、真に近縁であるかどうかははっきりしない。その1種は熱帯アメリカ産のオウギワシであり、ほとんど同じ地域には近縁の *Morphnus guianensis* が分布するが、これはオウギワシほど大きくはない。もう1種はフィリピン産のサルクイワシ *Pithecophaga jefferyi* であり、ニューギニア産のニューギニアワシ *Harpyopsis novaeguineae* はこれに近縁であろう。この4種は森林性であり、樹上性の中型獣（サルやナマケモノなど）や大型の鳥を樹上でとる。その意味ではこの類はハイタカ類を大型にしたようなものであり、飛翔型も似ている。

### 9．山ワシ類（約30種）

最後に、イヌワシ属の9種とクマタカ属の10種を中核とする、世界じゅうに分布している大型のグループがある。これは中型、小型の哺乳（ほにゅう）類や大型、中型の鳥を専門にねらう陸のワシで、主として地上の獲物を襲う点でオウギワシ類と異なる。この類とオウギワシ類こそ、真の猛禽と呼ばれるのにふさわしい鳥で、シロハヤブサなど大型のハヤブサ類やワシミミズク、シロフクロウなど巨大なフクロウ類とともに、肉食鳥類として最高の発展段階をあらわすものといえるだろう。

イヌワシ属の鳥はこのグループのなかでも大型のほうで、そのなかには真の森林性のワシは1種もなく、アフリカの東北部と南部の岩地にすみイワダヌキを主食とするクロコシジロイヌワシ *Aquila verreauxi* や山岳性のイヌワシなど中型のけものを主食とするもの（イヌワシでも大型鳥や動物の死体をかなり食べることがある），トカゲ，ヘビ，鳥などをかなり多くとるアフリカのサバンナのヒメイヌワシ *A. wahlbergi*、この類としては小型でおもに小獣をとる樹木の多い土地のカラフトワシやアシナガワシ，動物の死体も含めてけもの，鳥，トカゲ，ヘビなどいろいろな獲物をとるカタジロワシやソウゲンワシなど樹木の少ない開けた平地性のもの，とさまざまである。



アフリカクマタカ属の5種はイヌワシ属に近縁な小型のワシで，旧世界の熱帯から温帯にかけての森林に分布し，鳥獣を狩る。熱帯アメリカ産の *Spizastur melanoleucus* もこれに近いやや小型のワシであり，アフリカ産のエボシクマタカは疎林性で地上の小獣を主食とする。また，クマタカ属の10種は世界の熱帯に広く分布している森林性の中型ワシで鳥獣を地上でとる。山ワシ類中でもとくに大型のカンムリクマタカ *Stephanoaetus coronatus* はアフリカ産で，オウギワシやサルクイワシに匹敵する巨大なワシであり，同じく森林性でほとんど中型獣だけを食べる猛禽だが，オウギワシ類とは違って，樹上で獲物をとることはしない。南アメリカのアンデス山脈にすむ大型ワシの *Oroaetus isidori* もクマタカ類に近縁らしいが，この鳥が森林の樹上で哺乳類をとる点はむしろオウギワシ類に似ている。

アフリカ産のもう1種の巨大なワシのゴマバラワシは，森林ではなく開けた場所にすみ，獲物の8割は地上性の大きな鳥で，獣類は少ないという。インドから東南アジアに分布するカザノワシ *Ictinaetus malayensis* も大型のワシのほうだが，鳥の卵やひなと小獣をとる変り者で，森林や樹木の多い土地にすみ，樹上でも地上でも獲物をとる。この鳥は，形態上も山ワシ類としては変り者でトビ類に似たところがあり，もしかすると〝山へ上った〟海ワシではないかという疑いさえある。

## B　ハヤブサ科

ハヤブサ科のメンバーはワシタカ科にくらべればずっと少ないが，それでもおよそ55～60種に達している。そしてそのなかには，山ワシ類やハイタカ類に匹敵するような猛禽から動物の死体にたかるものまで，ワシタカ科と同じくらいさまざまなものが含まれている。この科には4つのグループが認められるが，そのうちでふたつずつはたがいに近縁であると考えられている。

### 1．カラカラ類（約10種）

ハヤブサ科についても，ワシタカ科と同じように，猛禽性でない鳥から進化したのだろうと考えられるが，その点で原始的な性質を残していると見られるのが中央・南アメリカ産のカラカラ類である。メキシコ東南部からブラジルにかけて分布するアカノドカラカラ属 *Daptrius* の2種は，トビ類の一部と同じように目の上の張りだしがなくて，猛禽らしくない顔つきであり，くちばしも鋭い鉤状ではなく，飛翔型もトビ類に似てつばさが長い。このうち1種は開けた疎林や林縁に生息し，小獣の死体や鳥のひな，昆虫，クモなどを食べており，もう1種は森林にすみ，樹上のハチの巣を襲って幼虫やさなぎを食べたり果実を食べたりしている。このようにトビ類やハチクマに似たものがハヤブサ科にもいることはたいへん興味深い。

また，コシジロカラカラ属 *Phalcoboenus* の4種はアンデスの高山帯から南アメリカ南端のフエゴ島やフォークランド諸島にかけて分布し，大型昆虫のほか小獣の子や鳥のひな，死体，ごみなどを食べており，フォークランド諸島の1種はペンギンやアホウドリなどの海鳥の集団繁殖地でひなの死体や小さなひなをねらっている。

オーデュボンカラカラは，中央・南アメリカに広く分布する種で開けた場所にすみ，そこの地上でとれるあらゆる小動物を食べている。この属にはメキシコ西北沖のグァダルーペ島で絶滅した1種がある。チマンゴカラカラ属 *Milvago* の2種はパナマから南アメリカ南端までに

→ *



イヌワシと並ぶ日本最強の猛禽・クマタカ　　撮影　竹村彰介

哺乳類の世界を探る 10

2部　種としてのあり方

# 大きいことの有利性

小原秀雄

人間が生物界のなかで巨大な地歩を占めた理由のひとつは、からだが大きすぎもせず、小さすぎもしないためだという。体重や身長（体長）の相対評価を数値として表わしたのを見て、なるほどと思うと同時に、いったいなぜこういった大小があるのかと考えたものだ。中くらいがいいならば、どれも中くらいでとどまればよいのに、どうして大小があるのだろうか。

これは相当な難問だ。クジラは最大の動物で、シロナガスクジラは体長33メートル，体重100トン以上というのだからかつての恐竜よりもはるかに大きい。

動物は進化するにつれて、全体としては大きくなっている。内骨格の動物のほうが、外骨格の動物よりもはるかに大きくなれるのは、体構造が容易に〝建て増し〟できるからで、外骨格ではいちいちかたい殻をぬぎかえねばならない。そのエネルギーのロスを考えただけで、大きくなることには制限があろう

### 大型化への進化

だが、内骨格の動物のなかにも大小がある。総体として哺乳類は大きな動物だが、体長数センチ、体重数グラムのトガリネズミ類やジネズミも含まれている。総体として大きくなるのは、進化の問題である。たびたびいうことだが、それは実態として大きくなったというだけで、深い根拠はわからない。だが、ウマでもゾウでも、ひとつの系統でははっきりと大きくなる方向に進化してきたことが、化石で跡づけられる。

種によって大小があるのは、適応放散で説明がつく。もちろん、なぜ適応放散するのか、さらにそれが発展的なものなのかは、また疑問である。しかし実際には、現生の哺乳類ほど大小に多様性のある存在はあるまい。最小のトガリネズミとシロナガスクジラとの体重比は1：3000万ほどになる。

哺乳類の化石を調べてみると、小型の動物はもともと存在していた。もちろん小型なりに、大小の多様さはあった。しかし、哺乳類としての最小のものが、今のトガリネズミなどで、食虫類に属していることは、小型の動物のほうには、あまり変化が見られないことを示している。すなわち、現在の支配的な哺乳類である真獣類のもっとも原始的なもの、すなわち祖先型とみられるのは古食虫類であり、現生食虫類はその形質をなお受けついでいるからだ。

では、なぜからだが大きくなる方向への進化があるのだろうか。からだが大きくなったほうが、エネルギー的に有利であることは前述した。生態的にもまた、大型化することは有利である。

ひとつは食物の量のうえで、相対的に少しですむからであるが、これはエネルギー的なものと同質の問題であり、そのほかに防御のうえで、大きいことは天敵に対していくらか有利である。ライオンやトラのような、大型の捕食獣はともかくとして、中小型の捕食獣に対しては大きなほうが有利なことは容易に想像がつく。各種の哺乳類にとって天敵は決して一様ではないが、たとえばヒョウがヌーを捕える場合、ふつうは子をねらう。小さいものをねらう傾向があるのだろう。



この傾向が淘汰圧として働くのは、なおごくわずかであろうが、一般的に同種内では〝大きいことはよいこと〟なようである。

オットセイやハイイロアザラシ、ゾウアザラシなどは、その典型といえる。発情期になると雄は土地争いを演ずる。個個にはさまざまな意味での力量の差はあろうが、一般的には大きいほうが強い。ふつうは成育の段階で差がつく。この差が印象的なのがゾウアザラシで、若い雄では鼻がまだ発達していないため、鼻先を口にさし入れ、鼻息を吹きだして発する独特の声も哀れである。それに対して、成獣の雄はみごとな声を発するから，相手を威圧する，示威的なコミュニケーションの成果を生みだす。鼻だけ大きい個体がいるかどうかは別として、ふつうは成熟度の違いがこの差を生みだす。

大きいほうが有利であるのは、示威だけではなく、実際の闘争においてもそうである。ディスプレーを見ればよくわかるが、たいていは立ちあがったり毛をさか立てたりして、自分を大きく見せようとする。ネコのディスプレーもそうであり、ゾウアザラシも上半身を高々と持ちあげる。カンガルーはよく背のびする。

こういったかれらの行動を見ると、大きいほうが有利だということが、種の世界で了解されていることを示している。からだの大きさだけではなく、大声でほえたり、力強く胸をたたいたりすることが、ディスプレーとして役だつことも、肉体的な強健さを誇るのであろう。

シカでは、枝がないつのの雄でもハーレムを持てるが、一般的には雄ジカの太い首筋と大きく枝分かれしたつのは、力

## カラーページ解説

＊ ——→

分布し、密林以外の場所で動物の死体を主として昆虫、鳥獣の子などを食べており、明らかにコンドル類やハゲワシ類に近い生活をしている。

### 2．モリハヤブサ類（約5種）

カラカラ類に類縁があると考えられるのが中型から小型のモリハヤブサ類である。その1種ワライモリハヤブサは熱帯アメリカに分布し、樹木の多いところにいて、枝上から地上のヘビやトカゲの上に飛びおりてとる暮らしをしているという点で、ワシタカ科のカンムリワシ属に似ている。別属のモリハヤブサ属 *Micrastur* は4、5種があり、やはり熱帯アメリカ産だが、森林性で短くまるいつばさを持ち小鳥を主食とするという点は、ハイタカ属に相当するものということができよう。

### 3．ヒメハヤブサ類（約8種）

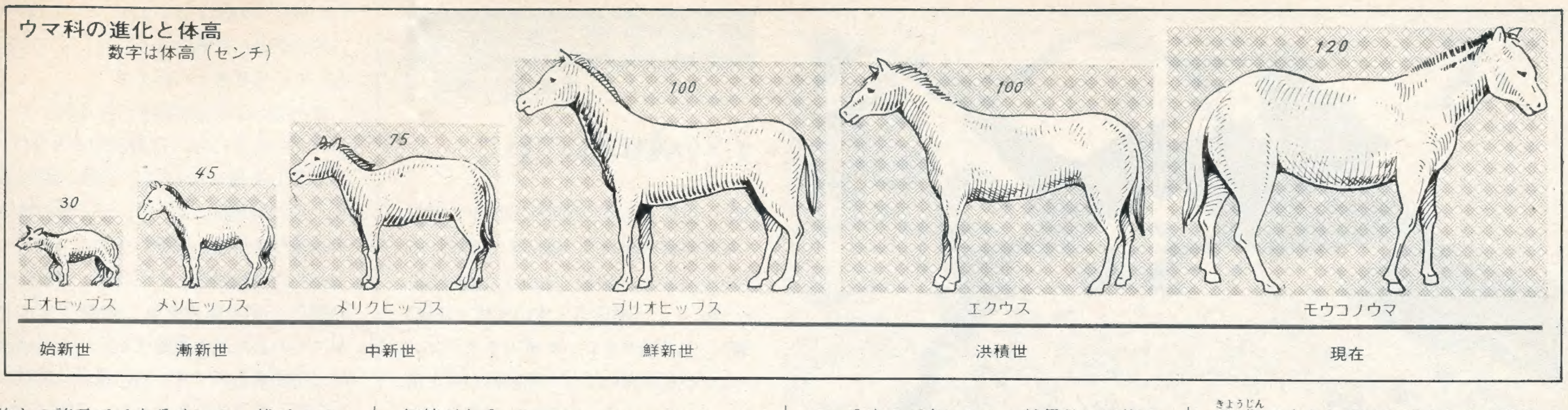
ワシタカ目約280種のなかでもっとも小型のグループが、このヒメハヤブサ類である。ヒメハヤブサ属 *Polihierax* には2種があり、1種は東アフリカと南西アフリカの乾燥した半砂漠地帯にすみ、もう1種はビルマから南ベトナムにかけての疎林にすんでいる。全長は20～25センチくらいであり、主として大型昆虫をとっているが、トカゲ、ヘビ、カエル、小鳥なども食べている。また、アメリカヒメハヤブサ *Spiziapteryx circumcinctus* はアルゼンチン西部の半砂漠やサバンナにすむ小型の鳥だが、食物ははっきりしていない。現地人はこの鳥は小鳥をとるといっている。

ハヤブサ科での、またワシタカ目全体での、最小型の鳥は東南アジア産のスズメハヤブサ属 *Microhierax* の5種である。なかでも小さいのはマレー・スマトラ・ジャワ・ボルネオに分布するマレースズメハヤブサ *M. fringillarius* とボルネオ北部のボルネオスズメハヤブサ *M. latifrons* であって、いずれも全長14～15センチしかなく、文字どおりスズメと同じ大きさである。この属の鳥は森林性であるが、小さいながらもハヤブサ的なからだつきとくちばしをしており、獲物をとるときには空中であしを使ってつかむといわれる。その獲物は主として大型のトンボ、ガ、チョウであるが、一部の種では小鳥もとり、ときには自分と同じくらいかやや大きな鳥までもとるという。

### 4．ハヤブサ類（約35種）

典型的なハヤブサ類は30数種あるが、それらはすべてハヤブサ属にまとめられている。そのなかには全長25センチくらいの小さなものから全長60センチを越える大きなものまであるが、形態上の特徴からすると4つから5つのグループに分けられ、それはおおよそ食性と採餌習性に対応している。しかし別属に分けるほどの大きな形態上の違いはない。

そのひとつは開けた場所で主として地上の獲物をとるチョウゲンボウ類の10数種である。これはハヤブサ属としては中型から小型の鳥であってほとんど世界じゅうに分布し、典型的には小獣類を見張り場または停止飛行から襲ってとる。この点でこれはワシタカ科でのノスリ類に




強さの誇示ではあるまいか。雄ジカは、よくつのをこすってマスターベーションをしており，シカのつのが性徴に見立てられて，性の器官と考えられる点もあるから，単なるディスプレーの器官と見るのは一面的ではあろうが，からだが大きくなったシカの種は，アカシカ，ヘラジカ，トナカイなど，たいていつのも大きくなっており，しかも種によってつのの形態は少々異なっている。

シカの世界では，つのによるディスプレーだけで戦いがすむわけではあるまい。また実際の戦いでは，枝づののない雄が相手に強力で直線的な打撃を与える可能性も強い。しかし，それは実力のうえでのことであって，現実には損をするだろう。

また，戦いが儀式化してきて，個体の損耗を抑制する傾向も発達してくる。そして，儀式化が進めば進むほどつのもからだもりっぱな個体が，ハーレムを残す可能性が高くなるといえよう。

野ネズミでは，同種内でも大型のものが小型のものを圧倒して，食物を多く確保してしまう。雄どうしの戦いで雄を排除するしくみも，大きいものに有利となっている。大きいものが必ずしも健康かどうかは断言できないが，全体的には，種のよりよい維持にとって大型の個体は価値がある。

### 種内協力のあり方

だが，〝負けイヌ〟のことばどおり，強さには心理的な要素が加わるし，種内の競争だけを強調して大きいほうがよいとするのも一面的に過ぎよう。種にとっては，元気のよい子を残すための競争的な成育，そのなかで育った強い雄ほどよい場所になわ張りを設定できるので，強い子孫を多く残すというしくみは，決してマイナスではないが。

このほかに哺乳類の種内では〝協力〟もある。イルカやゾウが，傷ついた同種の他個体を助けてささえたり，群れとして子を守るといったしくみも発達している。協力といっても，種の積極的維持に役だつなわ張りを崩壊させるようなしくみであってはなにもならない。

そこで，協力関係は同一家系内で発達したらしい。しかも，非交尾期には雄どうしの敵対関係が解消される。シカやウシなどがそうだ。群れは血縁を基礎としているだけに，内部の協力関係は，このような時期により強く形づくられる。結局は群れ内部の子どもを助けることになり，種の維持に役だつ。

ところで，交尾期の雄は自分の雌を他から守る。交尾期には母と子がいっしょにいるものが多いから，結果的には雄は群れを守る働きをすることになる。雄が群れを守る行動は交尾期以外には解消してしまうことが多いが，それ以外の時期でも，種によっては雄が外敵から雌と子を守るものもある。これは交尾期に見られる他の雄から雌を守ろうとする基礎的な行為の変型ではあるまいか。

霊長類では，群れに雌雄それぞれいる場合が多いが，これは交尾期がはっきりしていないことと関係があろう。しかも交尾期における防衛の意味だけではなく，群れの個体間の結びつきがあるようだ。所有の記憶や愛情（？）の問題があるのだろう。

群れが重要な働きを持っていることがわかってくると，ますます単独生活者の存在が不思議に思えてくる（真に単独生活者があるのかどうかも問題だが）。

こうして〝争い〟も〝協力〟も，ともに種の維持には積極的な役割を果たすのであるが，種内では大きいものが優位に立つ傾向がある。この〝協力〟も小さいほうを優位にするためではなく，ある行動のために個体が消費するエネルギーを群れ全体として平均化させ，損耗を特定個体に集中させないためだ。そうしないと，なにかの事故で少数になった場合に種の維持はむずかしくなる。その意味で強靭で大きな個体を残すための闘争は，個体数が少なくなってくると弱まる。

### 小さいままでいる動物

ところで，大きいほうが優位に立つようなしくみが働くとすれば，小さい種はどうして残っているのだろうか。それはまた，生物の生活をめぐる諸条件，つまり生態的なあり方からすると，個々には大きいほうが有利だとはいえても，その種にとって大きさは適応の限界にもなっていると思われる。

小さな家ネズミ，ハツカネズミは，中型のクマネズミとは共存しにくいが，ドブネズミとは居をともにできるという。

ある実験では，同じケージのなかで，ハツカネズミはドブネズミを避けて，敏速にふるまい，ドブネズミと食べ物（ハツカネズミは少量でよい）を分かちあうという。この実験のようなことが実際にも行なわれ，共存が可能なのだろうとのことである。

これは，なぜ小型種がいるかという疑問や小型種は自然界ではなかなか大きくはなれず，ひょっとすると，より小さいほうに進化することもあり得るということに，ひとつの示唆を与えている。■

（女子栄養大学教授）

イラスト・小林敏也

## カラーページ解説

あたるともいえる。このなかではチョウゲンボウのように食物の大半を小獣にたよっているものもあるが，7，8割がバッタなどの昆虫というものや，ほとんどすべてがトカゲであるものなどがあり，ユーラシアの中北部で繁殖し南アフリカで越冬する中型のアカアシチョウゲンボウのように繁殖期には食物の7，8割がカエルだといわれるものもある。

また，コチョウゲンボウ類はコチョウゲンボウおよびアフリカ・インド産の *Falco chicquera* の2種があり，開けた場所で主として小鳥を空中でとる。

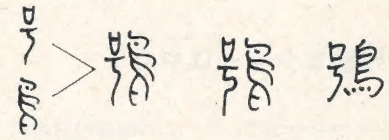
一方，やや樹木の多いところやときには森林にすんで，小鳥や昆虫を空中でとるのがチゴハヤブサ類の約12種であるが，これは北アメリカを除くとほぼ世界じゅうに分布している。このなかには明けがたと夕暮れにコウモリもとるものが何種もあり，熱帯アメリカ産でやや小型の *F. rufigularis*（= *F. albogularis*）はとくによくとるので Bat Falcon と呼ばれている。この類は小獣やトカゲを地上でもとるが，その割合は多くない。

最後に同じくほぼ世界じゅうに分布する約10種のハヤブサ類があり，シロハヤブサやワキスジハヤブサなど大型のものは地上の獲物をとることがかなりあり，小獣か地上性の鳥をねらうが，中型から大型のハヤブサや熱帯アメリカの *F. deiroleucus* はもっぱら空中で豪快な狩りをして鳥をとる。開けた場所で空中で狩りをするというこの習性は，ワシタカ科には見られないものであり，これこそハヤブサ類の特徴といえるのである。■

（山階鳥類研究所所員）

## 漢字のふるさと　85

藤堂明保



**鴞・梟**　（ふくろう）　どちらの字を書いても，同じくキョウと読み，今の中国語では xiāo と発音する。

まず第一の字「鴞」は，「鳥＋音符号」からなっている。「号」という字は「口＋息が下からまがって出てきて一印につかえたさま」を組みあわせたものだ。つまり低い，だみ声でゴウ！　ホウ！　と呼ぶことを「号」というのである。のち号令をかけるという場合でも，太くあらい声で叫ぶからこそ「号」というのであって，金切声やか弱い女の声は「号」とはいわない。

フクロウのなき声は，ホウホウと低く濁っている。そこで「号＋鳥」をあわせて鴞というのである。これも鳴き声をまねた擬声語である。ところで第二字はどうか。むかしフクロウを捕えた人は，それを串にさして高い木の上にさらし物にした。それを見ると，他の鳥どもが恐れて寄りつかないそうである。そこで「鳥＋木」をあわせて梟と書き，のち罪人の首を木架にさらすのを梟首（きょうしゅ）というようになった。いずれにせよ，梟（鴞）のイメージはよいものではない。だから夜盗のかしらを梟雄（ふくろうのかしら）などと呼んで，嫌がったのである。■



# 北国動物記 7
## ナキウサギ

写真と文 富士元寿彦

氷河期の遺物といわれているナキウサギは，北海道でも主として大雪・日高山系の高山部にすんでおり，ガレ場の岩のすきまなどにいる。

「ピチー・ピチー」と鋭く，小鳥のような声でよく鳴くことから，その名がある。動作は非常に敏捷で，岩と岩とのあいだをちょろちょろっと走りまわって，えさの高山植物を食べ，すぐまた岩と岩のあいだへ逃げこむ。そこは何本かの通路になっているらしく，はいった穴とは遠く離れたところから姿を現わすことが多い。じっくり観察することができなくて，たいへん苦労した。

ナキウサギは，世界的に有名なアマミノクロウサギよりも原始的で，古い生物的な要素をもっているといわれる。からだはモルモットのようにずんぐりしていて，耳はふつうのウサギよりも短く幅広で，ネズミの耳に似ている。足は前と後ろの長さが同じで短い。小さいながらも気候の変化には強い動物だ。

冬になっても冬眠はしない。そのため外が雪でおおわれて，高山植物などのえさがなくなっても困らないように，夏の間にせっせとえさを岩陰にためこんでおくのである。

ナキウサギは夜も活動しているようで，その鳴き声を夜中に聞いたことがある。また北見地方にすんでいるものは，山岳部にいるといっても，さほど高いところではないようだ。日高，大雪，北見の山間部が主要な分布域とされているが，道内のどこかの山に案外たくさんすんでいるかもしれない。■

（写真は日高七ツ沼カールで）

# 仲間のひろば

## 残酷なショーはやめて

ハブとマングース。この両者の対決についての話はずいぶん聞いた。しかし，この対決を〝見せ物〟として商売の道具にすることが許されていいものだろうか……。

修学旅行中に泊まったある旅館で，ハブとマングースのポスターを見た。ただ飼っているのだろうと見にいって，そこではじめて客寄せの対決ショーだということを知った。わたしはそれを見なかったが，何人かのお客がはいっていた。

なぜ殺しあいをするのを見るのが楽しいのだろうかと，まず思った。ハブとマングースは宿命的に対立するものなのか，食事を減らすなどして対決させたものか，そのどちらかは知らない。しかし，野生動物は無意味な殺生をしないと聞いていたし，マングースにしてもハブだけがえさではないのだろうと思うと，やるせない気持になった。

わたしには，くわしいことはわからないが，しかし明らかに動物たちを商品にしてもうける商人の姿勢はまちがっている。人間の動物虐待はどこまでいくのだろうか。ワニ皮の財布，ミンクのコート，そして生きもの自体の商品化。こういうことを考えると，人間の動物虐待には，一種の興奮感，満足感，優越感がともなっているように思える。

人がウシを殺して食べる。これは生きるためのいたしかたない処置としても，装飾や娯楽などのための殺生は許されてはならないものと思う。動物をペット化することの是非などもたいせつだが，この現実に起こっている明らかな動物虐待について，もっと多くの人が関心を持ってほしい。■

（西宮市・河合裕子・17歳・高校生）

# ペット相談室
担当 前川博司

## イヌの遠ぼえについて

〈問〉 生後8か月の秋田犬ですが，ピアノなどの音を聞いて，遠ぼえします。イヌの声でもないのに，なぜほえるのでしょうか。 （横浜市・重田安代・13歳）

〈答〉 イヌはサイレンや車のクラクションなどの音を聞いて，一種独特の声を出すことがあります。大型のイヌのほうがよく遠ぼえをするものです。声の調子や高低や長さに多少の違いがあっても，いずれも，長く一声で「オー」となきます。そのときイヌは上を向いて，動かないで，なんとなく，さびしげな静かな表情をしているものです。

遠ぼえについては多くの学者や愛犬家の意見があります。もともとは，オオカミが仲間どうしで呼びあうときに出す声のことですが，イヌも人に飼われる以前の大むかしには，この遠ぼえしかできなかったといわれています。

イヌが人間と生活するようになってから，自分の身近い区域になわ張りをつくり，そのなかに侵入してくるものに対し警戒するようになって，はじめてワンワンとなきはじめたのだとされています。人間との共存生活が長く密着してくると，イヌどうしで呼びあう必要がなくなり，自然と遠ぼえはしなくなったのですが，とはいえ大むかしのなごりである遠ぼえがイヌから消えてはいないというわけです。そうして遠ぼえに似た音が聞こえると，それを仲間が呼びあう声として聞き，それに和して遠ぼえをするのだといわれています。

また飼主が遠くにいくのを見たり，数頭の飼いイヌのうち何頭かを残して散歩に連れだすと，残されたイヌが遠ぼえをすることもあります。これらはイヌが人間や仲間のイヌから離れたことに対してのさびしさなどを訴える感情の表現だと考えられています。遠ぼえは，ある一定の期間まで成長したあとから始まり，子イヌ時代にはしないようです。

あなたのイヌの遠ぼえは，他の音に対して感じてするようですが，それはある一定の調子と音域のものに対してだけ反応していると考えられます。

耳のなかには音を聞きわける蝸牛という曲がった管になった器官があります。その中心を縦に分けている薄い膜があり，音の振動数によって，その膜の特定の区域だけが強く振動します。サイレンなどの高い振動数をもつ音は，つねにその膜の一定の部分を強く振動させますが，そのあたりが振動すると，イヌは遠ぼえを始めるのです。膜の振動は神経に伝わり，電気的な信号となって脳に送られます。

脳はこの電気的信号を受けて，これを音として理解し，聞いているわけです。脳には音の記憶センターのようなものがあり，そのどこかが刺激を受けると，その部分の記憶がよみがえり，特定の音として聞くのです。同時にその音に関連した感情や記憶が，呼びおこされ，それに対応した表情や行動を起こさせるのです。ですから，遠ぼえするということは，その音の記憶が脳になければならないわけです。脳の音のセンターに，遠ぼえの音の記憶がしるされていなければ，それを聞いて，それに応じた表情，すなわち遠ぼえをすることはないはずです。

その記憶が生まれる以前から生得的なものとしてあるのか，または生後いつのときか遠ぼえを聞いて記憶したのか，いずれかはわかりませんが，イヌはその脳の音のセンターに，遠ぼえの声の記憶をもっているのでしょう。

すべてのイヌがワンワンとか，キャンキャンとかなくのに，遠ぼえをまったくしないイヌがいるのは，ではいったいどうしてなのでしょうか。脳の音のセンターに，遠ぼえの記憶がないためでしょうか。でも，他のイヌの遠ぼえを聞いていても，いっこう気にしないイヌのほうがむしろ多いほどです。この答は，たいへんむつかしく，まだ解けないなぞですが，ワンワンとか，キャンキャンとかは，イヌの生理的な要素の強い声で，遠ぼえは，イヌの心理的要素が強い声だと考えれば，あるいは理解できるのではないかと，わたしは考えています。■

（動物愛護協会附属病院院長）

## 裏表紙説明

**ヘビ使い** あやしの笛の音色に合わせて毒ヘビを自在に踊らせるヘビ使いは，歴史の起源は定かではない。しかし，のこされている古い聖典に，がんとして口を割ろうとしない罪人を「ヘビ使いの笛にも踊ろうとしないヘビ」とたとえた記述があり，ずいぶん古いものらしい。

しかしながらこのヘビの踊り，実はたいへんな〝いかさま〟である。なぜならヘビ類の耳は完全に退化していて，聴覚器官は皮膚の下に埋もれてなんの役にも立っていないからだ。しかしヘビ類は振動にはきわめて敏感で，視覚も退化してはいない。そこでいかさまのからくりは，ヘビ使いが発する振動と，ヘビ使いがヘビの眼前で動かす物体（笛や手）の動きとで，あやつっているわけだ。■

Ph. C. Masson-Holmés Lebel

▶訂正 112号13ページ下のカツラチャボの写真説明中，「雌で675グラム……」とあるのは雄の誤りでした。

## 次号予告

6月6日発売


ベンガルハゲワシ

世界動物百科
116号 6／17

### カラーページ

ワシタカ科（つづき）
クロハゲワシ，シロエリハゲワシ
エジプトハゲワシ，ヒゲワシ
ハイイロチュウヒ，ダルマワシ
ハラジロワシ，カンムリワシ，ミサゴ

### 私たちの仲間

| | |
|---|---|
| 傷だらけの帰還・栄光のなかの死<br>コリー犬ボビーの物語（下） | 藤原英司 |
| 葉ずれの音<br>アマゾン動物記 28 | 伊沢紘生 |
| ワシタカ目についての2，3の問題<br>カラーページ解説 | 浦本昌紀 |
| 哺乳類の世界を探る 11<br>集団と個 | 小原秀雄 |
| 漢字のふるさと 86<br>鵩（フクロウ） | 藤堂明保 |

## 第65号～第128号（鳥類）のおもな内容

◉ 数字は号数，白ぬき数字は既刊



## 第1号～第64号（概説・哺乳類）のおもな内容



### 本誌の購読について

本誌は，全国の書店，朝日新聞販売店で取り扱っております。

毎週定期的に，配達をご希望されるかたは，お近くの，取扱店にお申込み下さい。

なお，本社直接購入のご希望のかたは，下記あてお申込みを願います。送料は，1部につき30円です。

朝日新聞東京本社出版業務部
東京都千代田区有楽町2－3 〒100
TEL. 03－212－0131

朝日新聞大阪本社出版業務部
大阪市北区中之島3－3 〒530
TEL. 06－231－0131

朝日新聞西部本社販売部出版業務課
北九州市小倉区砂津1－12－1 〒802
TEL. 093－531－1131

朝日新聞名古屋本社販売部出版業務係
名古屋市中区栄1－3－3 〒460
TEL. 052－231－8131


世界動物百科 通巻116号 昭和48年6月10日発行（毎日曜日発行） 編集・発行人 大田信男 発行所 朝日新聞社 東京 大阪 北九州 名古屋 印刷・凸版印刷 定価220円



ヘビ使い（説明 30ページ）

雑誌0632 6／10